35

明治四十四年北海道新報所載

渡邊重綱伯

附 玉藻會

特別
イ4
1919
315

雙魚堂録話

解泡録

東洋文庫圖書館

特
門 イ4
號 1919
卷 35

門 イ5
號 1380
卷 35

昭和十六年十月三日寄贈
市島謙吉氏

雙魚堂錄話 一

雙魚堂主人談

◎彎月と多佳話

現今では潰れたそうだが、新潟の二の町の青海屋は、二會と云つて、三會と並び稱せられた樓であつた。此二會には彎月樓と云ふ名があつた。スルト森春濤翁が舟江に遊んだ時に、彎月の名、雅は雅なりと雖も、所に適せず寧ろ彎月と改むるに如かずと云つて、翁は其竹枝の中にも『彎月樓前織月斜』の句もある。然るに今は潰れたそうだから、無月となつた譯である。また同じ新潟には田川屋と云ふ待合があるそうだ。曾て吉田梅城と云ふ詩人は、此田川屋を斯る粹な處と心得ず料理屋と間違いて、『青衫紅袖多佳話、醉倚舟江小醉樓』と吟じ、卽ち料理屋と心得た詩であるが、之れに就て或人は田川樓は寧ろ『多佳話樓』たるべしと云ふたが、成程之れならば待合に適すると思ふ。

◎雅目郷

元來文人といふ者は種々の雅名を工風するもので、單に其名を美化するのみならず中には面白い寓意を含蓄せしむるものがある。嘗て成嶋柳北の文章を讀んだ時に、中に『雅目郷』の文字があるので、何の事を言つたのかと大に解釋に苦んだが漸くにして分つた。それは『乞食町』と云ふ事である。東京では現今に於ては多少狀態が變つたが、以前の貧民屈と云へば、下谷の萬年町、豐住町、山伏町、芝の新網等は隱れなき處で、乞食も澤山住まつて居たものである。ソコで維新前あたり迄は、乞食の事を『あな錢者』と云ふて居たもので、乞食は一体に孔のある錢を喜ぶからである。ナゼ乞食が孔のある錢を喜び銀貨や銅貨を喜ばぬかと云ふに、彼等は時化の日、卽ち貰ひのない日には仕方なく〳〵、身上の一枚を脫して質に入れ、孔のない錢に代へるので、孔のない錢の這入るのは寧ろ不吉として居る譯である と覺つて見れば、朔北の雅目郷も成程と頷づかるゝ。

◎長蛇亭は長酡亭

上野の不忍池の長酡亭は、間違ふてよく長蛇亭と書てあるが實は酡である、酡は酒氣のために顏色紅を呈するを云ふのである。楚辭に美人既醉、朱顏酡些たりとあり、又王勃の採蓮の賦に『上客唇兮樂未休、美人醉兮顏將酡』など云ふ酡の字である。

雙魚堂錄話 二

雙魚堂主人談

◎圓了の出典

昨日は樓や所の雅名を話したが、今日は人の名の出典や雅名の事を二つ三つ話そうか。井上圓了博士は新潟縣の人で、敎門の出でまた哲學專攻の人たるは世の熟知する所である。嘗て氏に圓了と云ふ名の出典を問ふたが。それは『圓滿萬德、了達諸法』からだと云ふ事だ。

◎學堂の改號

尾崎行雄が新潟へ來た頃は、詩の雅號を『琴泉』と云ひ、盛んに詩を作つたもので當時の新聞には琴泉の詩が澤山に掲載されたものだ。其後東京へ歸つて來てから何かの時に四五人集つた席上に、故森田思軒が尾崎に、君の號は女の畫家の樣だと云ふと、傍に居た犬養木堂がそれを引取つて、ナニ女の畫家と云へば非常の負最目だが、實際は杉山流の按摩の樣な名だと云ふと、尾崎も急に厭氣がさして來て、此時から學堂と改號したのだ。ウム悍堂の名か、アレは尾崎が江戸お搆ひの時から初まつたのだ。

◎六石は磊々

越後出身の佐藤六石は、一寸詩を善くするので人にも知られて居るが、アレは阪口五峰の門人で、最初はつまらぬ者であつたのが、東京へ來てから名を擧げたのである。ソコで六石の號は何から出たかと云ふに、磊々と云ふ意味からだと云ふ事である。

◎國會は『くにゑ』

之れは雅號ではないが、故中江兆民の妻君が明治廿三年に女子を分娩した、スルト兆民は早速之れに國會と命名したので或人が女の子には不似合の名でないかと云ふと、兆民笑つて曰く『ナニくにゑと云ふのサ』。

◎ペストの漢名

ペストと云ふ病氣は、黑死病抔と云ふた事もあるが、能い加減の事で、之れは妥當な漢名でない、處が吾輩の友人が之れを遺憾として、三日も要つて字典を撿索し、漸くにして獲たと云ふて報じて來たのを見ると『鼠』と云ふ字である。成程、病垂れに鼠とあつては、字の形としては頗る妥當のものであるが、意味からして果してペストの病症に適合するや否や疑問だハア……。

雙魚堂錄話 三

雙魚堂主人談

◎江州人と支那人

日本人の内て一番支那人に似て居るものは滋賀縣人即ち江州人である。元來日本人は比較的金錢に淡泊なもので、買物の際などに少し位の釣錢をとらぬ事は珍らしくない、殊に忙しい時などは猶更のことだ。處が支那人には斯う云ふ習慣がないので、日本人にして清國へ旅行の際など、斯う云ふ事などをやると、皆一驚して居る。曾て日本の軍事探偵の一人が、言語風采凡ての點に於て間然する所なく支那人に化し負せて、支那人も些細の不審を懷かなかつたのに、何うした機會からか軍事探偵たる事が發見したので、能く〳〵其原因を研究して見ると、全く或る買物に釣錢を取らずに去つたと云ふ事からであつた。ソコへ行くと支那人は全く違ふ、一文の金錢は無論の事、マッチを買ふにも一本づゝ勘定して買ふと云ふ有樣である。

◎計算的の江州人

處が我が江州人は此點に於て支那人によく似て居る。而て或る株式の當事者から聞く處に據ると、江州人は如何なる大きな取引に於ても、假令ば損の場合でも得の折でも、何錢何厘までキッチリ計算を濟ませぬ内は取引を行はぬと云ふ事で、江州人が如何に天品に計算的なるかは、投機賣買の如き極めて大サッパの取引にも、ハッキリ現はれて居る事でも分かる。

◎議員と十露盤

江州人が天品に計算的なる事は幾多の實例があるが、就中到底他府縣に於て見る能はざる一つの面白い事がある。それは滋賀縣會に於てである。滋賀縣に於ける毎年の定時縣會、或は時々の臨時縣會を傍聽する人は、必らず入場の各議員が何れも書類包みの他に一個のものを携帶するを認むるであらう。此一個のものは、實に十露盤で、議員は必らず銘々之れを携帶して議場に臨み、豫算でも決算でも直ちにカチ〳〵と彈き出す有樣は、實に凄まじいもので、確かに滋賀縣會の一異彩とすべきものである。

◎商業的根氣

計算的天才に類似して居る支那人は其商業上の努力根氣に於ても確かに似て居る處がある。支那人が世界何れの處に於ても、其足跡を印せざるなき遺口は、我が江州人が古くより關東方面に出稼ぎ的商業を試み、質素にして根氣ある『江州店』なる男世帶の商店は、到る處異彩を放つた例にも似て居る。兎に角支那人と江州人の對照は實に面白い事だ。

雙魚堂錄話 四

雙魚堂主人談

◎竹林七賢の遺跡

竹林七賢の遺跡は何處であらうか。一体竹林七賢人と云へば、人も知る如く晉代清淡の隱君子で、世を憤り竹林に隱れて蚊に襲はるゝを興がつて居たと云ふものである。吾輩は之れを以て其時分の寓言家であると思ふ、またそうかも知れない。處が或支那人に、其遺跡と云ふものを調べたと云ふ者もある、實は餘計な詮穿とも思ふ。併し其支那人が書いた『避暑錄話』と云ふ書に依ると、竹林の遺跡は今の懷州脩武縣にあると云ふて居るが果して何うであらうか。

◎二邸訪問の奇緣

此間用事があつて、麻布、芝を廻つた。麻布には德川賴倫侯を訪ね、轉して訪ふたのが三田の松方邸である、ソコで歸途車上に於て偶然今日は妙な處を訪問したのだと想ひ付いた。一体德川邸は元祿の昔吉良上野介の親戚の者の邸の跡で、吉良がアノ遭難以前赤穗遺臣萬一の復讐を慮かり、此邸内へ逃れんと企て、親戚たる邸でも其準備もやつたのに、遂に引移らすに難に罹つたものである。また一方小山町の松方侯爵邸も、仲々立派なもので庭園なども見るべきものであるが、之れ

は昔松方隱岐守上屋敷の跡で、彼の大石主税は此邸に預けられ、聽て切腹を命ぜられた由緒ある處だ。偶然にも赤穗事件に關係ある二邸を、半日に訪ふたのは頗る妙だと感じた。

◎前島家の一寶

前島男爵曰く、予が家二寶を藏す、宏りに人に示さずと。之れは何ぞと問ふて見ると、また變つたものである。先づ其一は三顆酒一函で、之れは去明治五年或外人からの贈物であるが、今を去る事七十年計り前、即ち西暦千八百四十二年の釀造に係ると云ふもの。他の一は、日本煙草の一袋で、之れは慶長年間の製造に係るものだと言はるゝ。

◎正誤 雙魚堂錄話第一中『雅目郷』とあるは『鴉目郷』の誤りに付き訂正す

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

四

◎樹木の病院

或る外國の學者は日本の植物園を見て『樹木の病院』だと評したそうだが、味づて見ると確かにそうで、森林學者の眼から見れば適評であらう。例へば樹の性質に依りては鬱林となすべきものを、三々五々放れ〳〵に栽えてある樣の事もあるまた樹木には陰樹と陽樹の二種があつて陽樹は陰樹の敵となるものであるから、之れを接近せしむるは大禁物であるのに頓着なしに栽え込んで置くもある。且つ陰樹は之れを並べて置けば、虫害の恐れなきものであるのに、並べぬで置たり、また陽樹は土地を荒すものであるのに、之れを平氣で入れて置くと云ふが如き、觀し來れば、『樹木の病院』と評さるゝも致方はあるまい。併し恁う云ふ植方をするのは、森林學の智識に乏しき計りでなく、一つには風致と云ふ事を重じたからではあるまいか。

◎風致論者と學者

一体風致論者と森林學者とは、其目的に於て全然相違するものがある、例へば風致一方で見れば、松樹の如き曲りくねつたのが風情があると云ふけれども、學者の方では之れを排斥する。清風竹林を動かし瑯玕の響をなすは風致論者詩人の喜ぶ所であるけれども。竹の性質は由來風を厭ふものである、また綠蔭群鹿の光景の如きは、人をして悠々世上の浮沈を忘れしむるものあるのみならず、鹿自身に於ても大に喜ぶのであるが、其實鹿は樹木の敵で、森林學者の喜ばざる所である。即ち風致論者と森林學者との間に於いては、往々(〳〵)枘鑿相容れざる事があるものである。

◎漢文の妙

支那は流石に文字の國だ、左まで面白からぬ事柄をも文字の遣ひ方で面白く感じさせる事がある。日本でよくある「無用者入る可らず」とあるのを、嘗て徂徠が其門生を集めて飜譯せしめた事があつたが、仲々(〳〵)旨く行かぬので、自から筆を操り「禁私車」とやつた、是れは餘り面白くもない樣であるが、併し無用者云々よりは雅である。其處へ行くと支那人乃至漢字に慣れて居る地方の者は旨い、朝鮮では此場合「閑人勿入」と書いてあるなどは流石に漢文に慣れたもので、徂徠に勝る趣がある。また日本にある『此處小便無用』と張札のある處を、支那では『君子自重』とやつてあるなどは、流石に露骨にあらずして典雅の書方である。

雙魚堂錄話

八

雙魚堂主人談

◎物の名と價値

凡そ名は實の賓なり、名實相適ふを以て上乘とするには相違ないが、併し其性質に依て名の爲めに其物の値打を高める例も尠なくない、例へば菓子の如き、『月の雪』とか『玉垂』とか云ふ雅びの名があると、一寸と摘んで見る氣にもなるもので如何に甘い味ひのものでも其名の雅ならさるものは、甘くない樣にも感ぜらるゝつまり其名に依て、感興を與ふることも多いので、器物、茶器の如きは、猶更の事である。

◎茶器の銘

元來日本の茶人は、物の名をつける、つまり銘などを選ぶと云ふ事には非常に苦心したもので、それに依て其器の價値を有し光彩を放つと云ふ例は尠なくない。例へば壞はれた青磁の茶碗に鎹を打つたのを、千利休は砧と名をつけて、之れより砧青磁の名は起つたものである。ナゼ砧と云ふか、壞れた茶碗だからひどがある、また○○どから響きに通はせて砧とつけたので、所詮牽強けには相違ないが、之れが雅の意味に因むで、面白く聞こえるのである。從て此種の銘をつけると云ふ事は仲々苦心のものである。

◎秋露と夏衣

アノ藤村庸軒、庸軒は儒者でまた茶人であるが、此人が初めて『置筒』の花生を作り出して、其の銘に『秋露』又『秋の扇』などとつけた。言ふ意味は置く露、若くは秋の扇にて捨て置くと云ふ樣な、即ち置くと云ふ處から出たものである。また攝

◎香の銘

茶器のみに限らず、香の銘にも同じ意味からのものが澤山ある。或る香に『痩馬』と云ふがある。此香は匂ひが薄い處から匂ひかねる、即ち「荷を負ひ兼ねる」から痩馬だと云ふ心。また伽羅に「月」と云ふがあるが之れは何處から聞えても同じ香で、遠近ともに薫すると殆んど月の如しと云ふ處から來たものだ。斯樣な次第で、多くは洒落半分のものであるが、併し古歌に更り或は故實

雙魚堂錄話

八

雙魚堂主人談

◎天王寺屋五兵衛

今日は大坂の話しをしやう。大坂では豪家と云へば鴻池が一番諸國に名が賣れて居る、尤も其以前には淀屋などもあり一時名も聞こえ、其他にも豪家は澤山あるが、實際偉らかつたのは天王寺屋五兵衛であつたと思ふ。ソコで天王寺屋の宅は現今の今橋の角で、角屋敷であつた。勿論之れは店であつて邸宅とは言へないが維新の後藤田組に購はれて、藤田が自分の會社を作らぬ前には、此を會社と定めたので、時には士足で疊の上にあがるなどと云ふ事もあり、大層に荒らされた。

◎辯護士の有となる

處が多賀谷と云ふ辯護士が、斯る名家の跡が荒廢に歸するは遺憾だと云ふので、之れを購ひ修繕を加へて住んで居る、此多賀谷と云ふ人は書道に熱心の人で、自分も同趣味である處から懇意となり、或時訪ねて見た事がある、此家は天王寺屋隆盛時代のものではない、火災の後改築されたものである、然るに仲々偉い處がある、元來大阪と云ふ處は、概して建築が低くて從つて誠に薄暗い。然るに此の家は非常に高く明るい事は大阪第一と云ふべく、其上材木の如き凡て雄大にて目を驚かすに足るものである。灘の中の金庫になつて居たと云ふ御影石は、現今は庭の敷石となつて居るが、之れも仲々佳質の石材で、流石に昔の樣が偲ばるゝ、今の持主の話る處に依れば、此家を改築する時は、小堀遠州がいろ〳〵材木の世話をし、片桐の舊宅に用ゐたものを貰受けて使つた事もあり、現に藏に用ゐてある木には、由緒が書いてあると云ふて居る。自分が瞥見した處でも、例へば欄間の透しの葉蘭の如きは、下畫も彫刻も確かに天正頃の名人鉅匠の手になつたものと思はれる。此天王寺屋は當時日本一の大分限者で、隣家に平野屋五兵衛と云ふ豪家があつた處から、此兩者の間にある小路には『十兵衛小路』と云ふ名さへついた。

◎天王寺屋の掛物

之れに就て思ひ出さるゝのは、曾て先者から聞かされた話だ。加嶋でも鴻池でも天王寺屋のお蔭で豪家となつたものである事は、此兩者から天王寺屋へやつた通ひ帳に『天王寺屋旦那樣』と認めてあるのでも分かる。また此天王寺屋滅後、家財拂物入札の際、恰かも自分の母方の先代が大阪に居會はせて、其時の樣を一覽した事がある。其際某と云名高い茶入が出ると、加嶋屋は物言はずに三千五百兩にて買取り、親戚を招き集め『拜見會』をなし、直ちに天王寺屋へ戻して舊恩に酬ゐたと云ふ事である。今日では天王寺屋の名も知らぬ人もあるが、實は鴻池以上のものであつた。

雙魚堂錄話

九

▲外山脩造と語る（上）

（雙魚堂主人談）

◎變つた氣風

關西實業界に其名を知られて居る大坂の外山脩造が、長岡近在の里正の家に生れたものである事は、長岡地方の人は多く知つて居る處であらう。彼れは主張が確乎として居る代りに隨分頑固の處もある。例へば株などを持つ點に就ても、自分が一旦持つた株は相場がどうあらうとも容易に手離さない。此邊になると利害を知らざるものゝ如くである。彼れは頗る着實で、物事には違算が無いが、隨分疎放の處もある。已れの關係して居る會社の配當を二年も三年も打捨てゝ受取らない樣の事もあつて、なか〳〵面白い處があるとは之れも大坂實業界の一人たる町田忠治の外山評である。

◎河井談を聽く

外山は兩三年以來非常に老衰して居るから、現今では込み入つた談話など無論出來ないが、以前は仲々元氣なもので、自分は大阪へ行く毎に訪ひもしまた訪はれもした事もある。外山は河井繼之助の門生で、河井の遺骸を會津で葬つたのは此人であると云ふから、三間も效して仕舞つた今日、河井を知つて居る人は、此老人ばかりであらう。ソコで自分が外山から河井談を聽いたのは、去明治三十五年の十二月であるが、當時北越殖報の今泉君が新潟東北日報の記者であつた頃『蒼龍窟』の著を刊行した時で、之を話の序としていろ〳〵の事を聽いた。聞く處に依れば今泉君は、昨年また新たに河井傳を公にしたそうである。自分は忙しいので、まだ其本を讀むでは居らぬが、外山の如き河井と關係のあつた人の談話は無論收錄してもあらうが、併し自分が今話すのは、自分が親しく聽いた事であるから、一ト通り述べて見やう。

◎河井の去就進退

先づ河井の去就進退に關し、自分の平素疑ふ處を陳べて開戰論者か非戰論者かを質した處が、外山の曰く、自分も其點は確とは分らぬ、唯だ當時の事情に就て自分が河井氏の心事を推する處に依れば、氏は確かに非論戰者で、出來得べくんば朝敵ともならず、去とて朝廷のために會津を擊つこともせず、居然自ら全ふせんとを欲したものと思はれると云ふ答へで此點は今泉君の傳する所と徑庭なき樣であつた。

◎河井負傷の實況

外山の談話中最も耳を傾けしは河井が流彈に傷つけられて、遂に命を致す迄の間の事である。外山の曰く、河井氏の尤も心配したのは新町方面であつた、此方面には三間を遣つたけれども心許なく思ふて自から遂に行く氣になり、そこへ赴かんとして遂に流彈に當つたのである。これより先、河井氏は城の大手の石に踞して指圖をして居られたが、自分は大崎彦助（大崎二六郎の父）を獄中より救ひ出して、河井氏の許へ馳せ行き此事を報した處が、氏は欣然として、虎〳〵虎は其頃の自分の名）貴樣は彦助をこゝへ呼むで來いとの命に任かせ、自分は馳せ行きしに、あとにて聞けば、自分が河井氏の側を離れた其間に、從僕は瓢簞を何れかへ持ち行き、燒酎を購ひ來り、一杯を主人にすゝめたそうである。氏は酒量の無き人であつたが、此時の一杯は大に元氣を加へ、新町方面へ應援する意を起されたものゝ樣に思はれる。

◎河井流彈に中る

全体河井と云ふ人は鐵砲を打つても『瞬きをせぬ』と云ふが自慢の人で、雨射の彈丸を毫も意とせざる人であつた、故に新町方面へ向つた時も、自分は他の四五の從者の列に加はつて行つたが、何分ドン〳〵彈丸が飛んで來るので、溜らなくなつて、我々は雁木の下を歩むで居るのに、河井氏だけは堂々大道を濶歩すると云ふ樣な事で、遂に流彈が一脚に中つて骨を折いた。骨を折いた音は恐ろしいもので、ヒドイ音が聞こえた。氏は二三歩行くと倒れた。そこで大騷ぎとなつて、戶板に載せて城へ舁き込むだが、その時は皆な狼狽して居つたから、彈丸のドン〳〵飛んで來る方へ河井氏の頭を向けて舁いだ處が、河井氏から遠にせよと注意を受けて、何れも成る程と漸く氣が付いた位である。

▲外山脩造と語る（下）

（雙魚堂主人談）

◎士氣の沮喪を恐る

道々も河井氏は自分を呼むで、虎おれの顏は蒼ざめて居るも知れんが大丈夫だ、人に決して重傷だなどゝ云ふてはいけないと謂はれた。何んにしても骨をメチャ〳〵に折つたのであるから、早速治療を要するのであるが、さて治療は出來ない、河井氏の發した軍令に、此の戰は兵の數が少ないから、負傷しても氣の毒ながら其儘にさしおき、介抱の爲めに兵の數を益々減するは不利益であると云ふ軍令を發したのであるから、河井氏自身も無論治療などを受ける氣がない。自分は側に居つて看病をして居つたが、或る日梨子が食ひたいと云はるゝから買ひに出たがなか〳〵見當らないので、見附まで行つて漸やく見つけたから一俵買つて來た、其の途中で長谷川泰に出逢つたから、河井氏がこれ〳〵であるから切斷を賴むと云つたけれど、長谷川も避難にのみ汲々として居つたものか、遂に治療に來て呉れなかつた。

◎河井の終焉

それから會津に避けると云ふ段になつてから、河井氏はなか〳〵承知しなかつた。然るに會津では河井氏の負傷を聞いたから、見舞の爲めに松本良順を早駕籠で遣はした。河井氏は松本の來たのを非常に喜こむだ、松本の言ふには貴君の傷を治するには八名の名醫を要すれども、こゝ迄八名の醫者を連れて來ることが出來ない、どうか是非そろ〳〵會津迄來て貰ひたい、そうすれば必らず其の痍を治するからと云ふた。松本は頗る辯才のある人であつたので、河井氏も遂に動かされて其氣になつて、遂に會津へ行く事になつ

早稲田大學圖書館

たが、實は松本も到底助かるべき痍で無いとを、承知して居つたに違ひない、それで餘り長く苦しめても無詮と考へて、早く命を致さしむる藥を與へたと思はれるのは、會津の境界に入り某驛に宿したとき、自分は其指圖に任せ、一杯の藥を河井氏に飲ませたが、河井氏は飲み終つて妙な藥だと云ふて居られたが、間もなく人事不省となつて譫語を吐き始めた、噯語は皆軍事に關する事のみであつた、如此して河井氏は會津の城下に達しない内に落命した、實に負傷後廿一日目である、以上は外山の話しの大要であるが、外山はこれを語りながら、懷舊の感に堪へざるものと如く、双眼に涙を浮べて居たので、自分も黙なからざる感に打たれた。

◎西園寺の帶劍

西園寺公望が總督で越後へ來たときには自分の家に泊つたが十八九歳位であつたらう、其時西園寺が書いて大人に與へた「靜以脩身公望」の額は、現今も此通り藏して居る、自分は其頃未だ乳母の手に在つたが、大人は賓客の慰みにとて十藏より銀製の噴水器を取出し、これを座敷の椽下へ置れたのを今尚記憶して居る、外山老人の話しに、西園寺は長岡で捕虜とならんとし、人に負はれて辛うじて遁れた、其の節狼狽の餘金造りの帶劍を忘れて往つたが、これを拿捕せる將士は、試みに純金か否かを驗して見た處が、全く天麩羅メッキであつたので、一笑を博したことがあると語つた。

◎外山發奮の動機

外山は自から發奮學に志した所以を語つたが面白ろい、彼れは戰爭の終つた後、人傳に大久保市藏が會津を評した語を聞いて發奮するに至つたと云ふ事である。それはどう云ふ事かと云ふに、大久保の言ふには、會津を以つて朝敵と云ひ、會津戰爭を朝敵に對する王師と云はれども、それは皮相の見で、實は文明と守舊の戰であるのだと云ふ事を聞いたときには、いたく刺激を頭腦に與へた。成る程智識がなければ順逆迄も誤まるものかと、これよく學に志す心になつたと云ふたが、面白ろい立志談だ。

尚外山に就ては、多少話しはあるが、餘り長くなるから、之れで置かう。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

一〇 大坂は水の都

大坂は水の都である、夜分など大坂に到着すると、まるで水上にいくつも〳〵嶋が浮えて居る樣に見える、其の汪々として流れ些の凝滯なきいかにも人をして爽快に感せしむるが、此の地に住める人の水を以つて名に命するが如き、寧ろ自然と云ふべきであらう。かの頼春水が其號をつけたのも、實は水の都に住み、水を見て感した爲めだと思ふ。春水江戸堀に居を轉じた折に、其喜をのべて『余僑居を江戸港に移す時に三月の望後なり、因て春水南軒と號す』と云つて居る。即ち川沿ひの家に住みあてた喜びから、此名を命じたことがわかる。春水は尚家の水に臨める樣を寫して云く『余が僑居は半ば水に架し、庭砌なし、船版を架すること方に二丈許り、幅厠の際に一二尺の地あり、藤を植えたり、陽に向ひ繁衍し花を着くること最も早し云々』これを以つて見れば翁の庭は即ち水にして翁が如何に日夕水と親しみしかを見るべきである

◎名人竹澤彌七

ある時坪内逍遙を訪ふた處が、座に一枚の錦繪があつた。之れを見ると、高座に三味線引が三人並んで、其前に多數の聽衆が音曲を聽いて居るものだ。逍遙の語る處に依れば、之れはいつか默阿彌の未亡人から借りて來たもので、明治八九年頃、大阪から東京へ下つて名聲を博した竹澤彌七と云ふ者の圖であるそうな逍遙は圖中の一人を指して曰く、之れを見給へ、此男の三味線は際立つて太く見えるではないか、默阿彌未亡人の語る處に依れば、三味線の胴の大きさは一尺五六寸で、撥も之れに相應じて居るのだから、婦人等はとても持てない、重量も非常に重いので、大概の者は、音一つだに出せぬと云ふ譯であつたと云ふ事だ。

◎東都の絃界屛息す

此竹澤彌七が初めて東京へ來た時には、なか〳〵豪勢な景慕で、三國一の三味線だと云ふ觸れ出しであつた。元來負けず嫌ひの江戸つ兒、之れを聞いて聊か癪に觸はり、贅六に何程の事があらむと冷かし半分に聽いて見ると、扨て東京中の三味線引は、皆んなアッと一驚を喫した。併し東京での名人鶴澤勇造も負けぬ氣になつて、大きなものを作つて遣つて見たが、之れも成功しなかつたので、東京無數の三味線界は、全く唯一個の彌七の爲めに蹂躪せられて、屏息の姿となつた。默阿彌も大に感服して彌七の需めに應じて、書き卸して遣つた事もある。彌七が得意の一たる『不動の滝』と云ふ曲の如きは、ゴー〳〵として飛瀑千丈、中天より落下するの響きあり、三味線の音とは覺えぬ程であつたと云ふ事だ、惜むべし彌七四十位にて沒し、多く世に知られなかつたが藝苑稀に見る一種の名人であつたと云ふ事だ。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

二〇 石黑男の腎藥談

石黑男爵曰く、僕の處へ諸方の賣藥家から石黑先生方劑と云ふ名が欲しいと云つて來るが、皆んな斷つて居る。併し藥で儲かる樣の事は一寸い〳〵聞かせてやつた。先年の事だが、人間は性慾の盛んなものであるから、先づ腎藥を工夫して之れを儲けの標準とするか第一だと注意してやつた事がある。果せる哉其後滋强丸と云ふのが出來て、爾來此種の藥が一日增しに流行して來た、つまり僕の先見通りである。との御自慢話しで。

◎支那の腎藥

續いて男の腎藥談が面白い、凡そ世界中で最も腎藥の盛んなる處は支邦で、其種類の多きも世界一である。曾て海城の役に配下の一醫官が敵の死骸のかくしの中から、小さな書籍を見付けたと云ふて僕の處へ持つて來た、之れは釉珍の豆本であるが、之れを讀むで見ると凡て腎藥の調劑法であつた。之れは勿論一例に過ぎぬが支那に於ては腎藥は廣く流布しては居るが、併し之れを作つて賣る事は進まぬから、大概自分で作つて用ひて居る。

雙魚堂錄話

一三

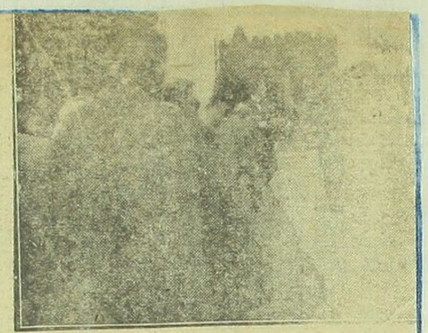
雙魚堂主人談

◎畫家と畫室

畫室と云ふものは畫家に取つては大切なものだ。例へば其室の大小とか、光線の工合とか、畫には非常に大切な關係を有つて居るので、如何に貧乏な畫家とも出來得る限り畫室の選擇には注意する。故雅邦の話に『平生の望みは千疊敷の座敷で一尺四方位の細畫が描いて見たい事だ』と云つたそうだが、之れは實に名言である。畫室は出來得る限り大きいが宜しい、規模大ならざれば其畫は勢ひ局少に失する、小室で描いたものは、大室へ賸けては一向に折合はない、畫の大小は必らずしも紙幅の大小には關係せず、名人の作は小紙に描くとも大きく見えるもので、それは其人の技術着想の如何にも由る事でもあるが、大に畫室の大小に關係して居る。古の大家が多く寺院を借りて大畫を作つたと云ふ事は、無理のない事だと思ふ。

◎畫家の沒素要

近來の畫家は兎角に素要が淺薄になつて來た、碌な學問もないのが作るから畫それ自身も淺薄になつて來た。是等に就て隨分笑ふべき話も尠くなくない。嘗て或る美術學校で『富麗』と云ふ課題を出した處が隨分澤山の作が集つた。そこで之れを審査して見ると多は『富』と『麗』とを別々に考へて、富貴の人が美麗な座敷に居る圖などを作つて笑を博した事もある。畫の技術は追々達して來るが、反對に素要は追々退歩して來た。畫家は三省すべしである。



◎曉齋の人格

猩々曉齋と云ふ人は、相當に描いたものだが、惜いかな品の惡るい人で、つまり市井の畫家であつた。そこで其氣韻に欠けて居つたのは、此人の人格が境遇の然らしめたもので、謂はど曉齋は魚川岸の者に筆を持せたと云ふ風である。嘗て春雨の泥ぬかりの日、曉齋ゆくりなく市中を歩いて居ると、日本橋仲通りの榛原の隱居が忙しそうにやつて來るのに出逢つた。スルト曉齋は『之れは〳〵』と云つたが、直に泥の中へピタリと土下座をして挨拶をしたので、榛原の隱居は、呆氣にとられてまご〳〵して居ると、曉齋は立ち上りながら、すぐ側の古着屋の店頭に吊してある立派の小袖で泥の手を拭き取つた。店の番頭之れを見て怒るまい事か矢庭に飛出して曉齋の頭をポカ〳〵擲る騷ぎに、隱居も默つて居られず、マア其小袖俺が買つたと料金を拂ふと、曉齋はニッコリして『之れは難有い膏藥代だ、負けてやる』と云つて、古着をはをつて宅へ歸つたと云ふ事だ。つまり曉齋は恁う云ふ樣な男であつた。

雙魚堂錄話

一四

雙魚堂主人談

◎五百羅漢の作者

淺草の花屋敷に陶製の五百羅漢があつて久しく喝采を博した事があつた。その羅漢は故小野義眞が作らせたるのである。吾輩は曾て其作者に逢つた。鎌倉の長谷に、小さな店で鎌倉燒と云ふのを燒いて居る老爺があるが、此老爺とフトした話の序に、これが羅漢の作者だと知れ、其時の苦心話も聞いた。老人の語る處に依れば、如何にも五百體の面相となると面倒のものである、二百體位迄は何うにか意匠も出來るが、之からは畫きてしまうとどれかに似たものとなる、そこで何うか良い手本が獲たいものだと思つて詮鑿すると、芝增上寺に兆殷司の粉本があると云ふので、苦心して之れを借りて作つたが、手が既に極まつて居るので、どれかに似ると云ふ始末で、種々苦心の末漸くの事で作つたと云ふ。此老人は愛知生れで、瀨戸の家病の直系を繼ぐ加藤太兵衛と云ふ者である。老人曰く、最初之れを作るときは、製造費千圓の豫算であつたが、出來上りは附屬品とも八百點以上となり、三ケ年も要かつた。それに毎日

早稻田大學圖書館

小野さんが來て、良いのがあると、自分の床飾りにするからと云つて持つて行く樣な事もあり、其補ひも作つた。弟子は三人も使つたと云ふ、傍に老妻あり曰く、之れは千圓の請負で最初は二百圓位殘ると云ふ勘定であつたが、と云つて老夫を顧みて、老爺さんは物さへ殘せば本望だと云つたが、愈よ先方から殘金を受取りに來いと云ふので行くと八錢五厘渡されたときは驚きました、橋場の渡錢が八厘宛であつたが、橋場の方へ工場を移したのも小野さんの都合上からの事であつたのに、小野さんの會計方は橋錢を差引くと云ふ譯で御座いましたからと云つて、流石に女氣の口惜しそうに語ると、太兵衛老人は平然としてアンナ仕事を今一遍して見たいものですと云、こゝらが工藝家氣質と云ふものであらうと、吾輩は熟々感した事がある。

◎富士山の名文

日本第一の富士山は、古より文人墨客の問題となりし事幾千回なるを知らざれども、若し其隨一は何かと云へば、恐らく野中至の『富士案内』に超ゆるものはなからう。野中の文章は必らずしも名文とするには足らぬかも知れはい、併し堅氷を履むで人の登山の出來ぬ時季に登山し、百日に亟んとする時日を絶巓に消したと云ふ事は、古來誰れが野中に匹敵するのぞ。野中は通常人の見る事の出來ぬ風景を見て、崇高なる自然の大觀を看取したものであるから、辭令は美ならざるも事柄は何千人の人の書き得ぬ事を書いてある。

雙魚堂錄話 一五

雙魚堂主人談

◎故古河市兵衛

故古河市兵衛は、流石に短かい一代の間に大事業家となつた丈け、少しく他に異なつた處があつて、何うしても事業界の豪傑であつたと思はれる。此人は學問をした事はないと云ふが、それは然うであらう、此人の手紙を見ると達者と云ふ修文句も怪しげなものであつた事でも分かる。彼れは人の何を學むだかと問ふた時に、淨瑠璃本を習つたと答へたそうだが恐らくそれは事實であらう。恁な譯で學問こそなかつたが、彼れが人を支配して信服せしむる技倆に至りては、確かに彼れは古豪傑の心術を得たものである。

◎使用人と同食

古河は死ぬ時分は別だが、長い間自分の使用人と同一場所で、同一の食事をやつたものだ。古河翁は隨分食物道樂であつたから、其食膳には常に山海の珍味を竟めたのであるが、必らず使用人と共にやる。また銅山から社員が出て來ると、如何程位置の低いものでも、非常に優待したものである。

◎知らぬ間に新衣

現今は足尾の銅山も立派な設備が出來て居るから、山係りの社員も不自由を感ずるなどゝ云ふ事はないが、昔は今とは違つて、山から出て來た人と云へば、衣服でも襯衣でも汚れあいに汚れて居たものである。然るに古河は之れに對して懇懃なる待遇をなし、其勞を犒らひ、且つ朝目を覺まして見ると、枕元に脱ぎ捨てゝ置いた自分の穢い衣服はいつの間にか、一切改まつて居る、羽織、帶、襯衣まで凡てがらりと新調のものが整へられて居ると云ふ譯である、之れが、社員に對して非常なる感動を與へた一つであるそうな。

◎社員と共に遊ぶ

それから古河は常にアノ濱町で有名な料理店、花屋敷の常盤へ計り行つて遊んだものであるが、此へも必らず社員を伴ふて行く、如何程位置の低いものでも連れて行つて御馳走をする。そこで老親でもある人には、大概の時間には歸宅せしむるが、此時は車に乘るまで市兵衛自身が送り出す。市兵衛氏常に社員に言ふ、お前達は若いから酒の飲みたいのも美人の見たいのも無理はないから、やつても宜しい、併し之れは仲々金が要かる、自分は此常盤へ計り來るので、此の勘定は通ひにして置く位であるから、みんなが遊びたい時は勘定などの心配はいらぬ、此へ來て遊びなさいと云つて、來る者も來る者もつれて遊ぶ。無論アノ人の事であるから、社員が遊びに行つても介意する樣な人ではないが、サア斯う言はれると一人で隱れ遊びも出來ぬ。殊に、主人の毎日の樣な御馳走が鼻につくので、自然と遊ばぬ樣になつて來る。古河の如き大鑛業會社の社員にして、放蕩者尠なく、比較的堅固のもの計りであつたのは、一面此待遇法が力あつた譯である。

◎合乘車で行く

尚一つの話がある。合は廢つて仕舞つたが、以前は二人乘の人車が澤山あつた。そこで古河は客でも使用人でも料理店へ伴ふ場合には必らず合乘車で行き、歸りにも差支ない限りはそうする。之れは甚だ親しくなるもので、斯る事に依ても常に交際して居る人や使用人から信服を博したもので、斯くて僅かなる一代の間に銅山王の名を贏ち得て、大富豪となつた譯である。吾輩が古河を評して古豪傑の風ありと云ふもの、敢て誣言にあらざるべきを信ずるのである。

雙魚堂錄話 一六

雙魚堂主人談

◎故諸戸清六の半面

伊勢の諸戸清六は一風變つた男であつた事は、毎々大隈伯に聞いて居つたが、去三十六年九月中、友人兩三輩と大坂から歸京の瀛車中、圖らずも邂逅したが、成る程異風の男であつた。吾々の乘つて居つた瀛車は一等室であつたが、名古屋驛から兩人の客が入り込むで來た。一人は問ふ迄もなく郵船會社の近藤廉平であつたが、これと相携へて這入つて來た男は隨分肥大な點に於て近藤に讓らない、しかも其の長は近藤を凌いで居る。

◎諸戸の風貌

晴天であるのに「ツマカケ」の掛つて居る高下駄を穿ち、衣服は紬の單衣に七つ下

早稲田大學圖書館

りの紹の羽織と云ふ扮裝で、顔には穢く
ろしく髯がはへて居つて、頭髪なども餘
り櫛など入れないと見えて、眞白に「フ
ケ」が見える。年齢は四十七八位に見え
るが、一寸見れば山出しに相違ないが、
よく見ると顔色に豪然たる處があつて、
臆面もなく外國人の前に毛だらけの「ス
ネ」をあらはし、近藤を相手に談笑自若、
時に腰を探りて煙具を取出して一尺五六
寸計りの長煙管を抽いてパク〳〵やる處
は、どうしても尋常人ではない。友人に
對して坐せる吾輩は、不圖諸戸の事を想
ひ起し、或はこれ渠れなるも知れすと案
ずる内、友人も同じことを想ひ出せしと
見え、友人は徐ろに「あなたは諸戸さん
か」と問ひしに果して違はず「然り」と云
ふ返答を得た。

◎聞いた諸戸と見た諸戸

扨て諸戸に會して兼て聞いて居る事と相違する事が二つあつた。曾て聞く處に依れば、諸戸は他人が半分も喰はずして投げ棄つる辨當を、勿体ないと取纒め、これを瀘車外に携へて貧民に與ふるほどの人、其の節儉なるは言ふまでもなく、なか〳〵瀘車など一等に乘る人ではないと思つて居たのに、不圖一等室に邂逅したのが意外であつた事だ。後諸戸を知る人に聞けば、諸戸は儉約ではあるが、瀘車は必らず一等を選む流儀である。なぜなれば一等室でなければ、手紙を書いたり、其他色々取調ものをするに不便であるからだとの説明であつたが、成るほどこれ位な主張はありさうな男である次に今一つ意外であつたは、曾て彼れは眼に一丁字なく、日記や帳面を書くに字を用ひずして畫をかく由を聞いて居つたが、これは諸戸を知らぬ者の構言であつた事である。渠れは人並以上の文字なしやも圖りがたけれども、決して世人が言ふ如き日用の文字に事を欠くが如き亞流に非る事は、渠れが軍中鞄より墨汁を取出し幾通かの端書を縱横に認めた事で證據立てられる。兎も角一風變つた男であつた。

雙魚堂錄話

一七　雙魚堂主人談

◎前嶋男の失策談

男が往年洋行された時には、日本でこそハイカラなれ西洋にては赤毛布たるを免かれぬので、時々愛嬌のある失策談もある。男は官命に依ての旅行なれば、到る處話方の宴會に招かれるので、ある時も舞踏會に招かれた。そこで例の西洋の式で。婦人の手を引いて其場へ這入る譯で男も嬶娘たる若いのをつれて行つた。男は此時手を引いて行きさへすれば宜しいと心得て、場に入るや否や自分は直に椅子に腰を卸したが相手の婦人は一向椅子に就かぬ。全体斯る場合婦人を先に椅子に就かしめ然る後自分も就くと云ふ式であるのに、男は一向に其邊にお構ひなしなので、傍人から注意を受けて赤面したと云ふ事だ。

◎屁を放つて逃出す

ある時男また宴會に招かれた。行つて見るとまた時刻が早いので、案内された廣い室に只一人で居た。すると頻りに放屁を催して來たが、折節あたりに人もなき事なれば、大事あるまいと思つて、ソッと屁を放さうとすると、椅子が螺旋仕掛だからセリ上げらるゝので、漸く放れた處で、一發放すと、西洋室の事とて音響がひびく、ドーンと響き渡つた音に、自分ながら狼狽し、一目散に戸外へ走り、其儘旅館へ逃げ歸つた。歸つてから氣がついて見ると、買つた計りの蝙蝠傘を捨てゝ來たので、重ね〳〵の目に逢つたとは矢張り男自身の談らるゝ處。

◎野宿の秘訣

前嶋老人、我々の書生の時分つかまへて曰く、「君等は安樂に學問をして居るから野宿などした事はあるまいが、吾輩は貧乏書生であつたから諸所を流浪して、時には山の祠にも宿り、時には全く野宿に一夜を明した事もあつた、處が暗中に一夜を明かすのは寐付かれぬものだ、或は人が來はせぬか、狼でも出はせぬかと懸念せられて仲々に寢付かれない。ソコで何とか安心して寢付く法はあるまいかと色々考へた末一案を得た。それは安線香を買つて携帶し寐る時に頭と足の方へ一本宛つけて寢ると、微かな光りではあるが心強い氣がして、それからは如何なる所でも熟々と寐付かれた、何うだ君等も一つ野宿をして、此の秘訣を試みては……」

雙魚堂錄話

一七　雙魚堂主人談

◎褌中の金時計

前原一誠の亂を起した當時、關口隆吉は山口縣令であつた。此關口は奇骨家であつた爲め、前原が一揆を起したと云ふ報を聞くや、之れを說破して降參させたいとて單身にて敵の陣營に到つた處が前原は之れを覺り、關口を殺して仕舞ふと云ふ計畫をして居る事を、關口また之れを覺り、敵陣を遁れ出で、赤褌となり土方の風に裏し、僅かに身を以て免かるゝ事を得た。後日關口人に語つて曰く、人間と言ふものは死活の境に立つても多少慾が殘るものだ、自分はアノ時あらゆる所持物を捨てゝ走つたが、金時計だけは惜しい氣がして捨てられず、さりとて裸体の身に隱し場に困り、己むを得ず犢鼻褌の中へ隱したが、サテ歩くとある物に觸れ合つて難澁を感じた、と云つた。

雙魚堂錄話

一八　雙魚堂主人談

◎瀧澤琴嶺の文庫

饗庭篁村が自分の近邊へ移つたと云ふので、顔出しをしたから自分も返禮に訪ねた。すると篁村は書齋から古い文庫を取寄せて自分に示し、之れは實に珍らしいものだと云ふ。之れを見ると百年位の年數を經たもので、往昔の手習文庫である長方形で中函があり錠があると云ふものだ。之れは曲亭馬琴一家の遺品である。底には何年何月の年月と「琴嶺瀧澤沈五郎所持」と書付け、瀧澤の燒印が捺されてある。書は馬琴の筆に違ひない。琴嶺は華山と同門の人で、馬琴の秘藏子息であるが、これを見ると、手習の當時既に雅號を持つて居た事、はた宗伯の幼名が沈五郎であつた事も分かる。また文庫の中を見ると如何にも立派なもので、桐のまさなどにて作りしを見ても、馬琴が其の愛子の爲めに意匠を凝らして作らしめたる樣をも偲ばるゝのである。

◎鈴木牧之の書簡

篁村は其の中から色々の尺牘を取出して示した、之れは馬琴が保存して置いた程で、何れも趣味あるもので、此の内から五六通を自分に割愛した。中に鈴木牧之から馬琴へ宛てた書簡がある。之れを讀むで見ると、北越雪譜も愈よ上木になつたから、出來上つた二冊だけ取敢へず御覽に入れる、自分も眼病に罹つて半分目が見えぬ、併し之れが成就すれば死んでも惜しくないと書いてあるので、如何にも同情に堪へぬものである。全体牧之は馬琴と親類交際をなし、馬琴の手に依て北越雪譜を作りたいと云ふ意で、其の約束までしたのだ、しかも馬琴の方に何か事情があつたか作らぬので、遂に山東京傳に頼むでやらしたのである。馬琴程の人であるから、併し眼を失つた處は同情を寄せたうが、此時は面白くなかつたらと云ふ事である。兎も角自分が此書簡を得たのは、實に喜ぶべき事である。

◎椎谷藩の蓮臺

北越雪譜で想ひ出したが、同書を讀むだ人は誰れも知つて居るが、昔し椎谷の沿（凧は京都にては正月なれど越後は積

岸に橋の杭が流れて來た、之れには峨眉山下橋と刻してあるので、詩名により珍らしいものだと云ふ事になり、椎谷侯から幕府へ其の所置方に就て伺ひを立てた處が、指令に依て稀來椎谷侯の漂品となり、之れを刷物にしたものも出來て、好事家の弄ぶ處となつたのは、誰れも知る事實である。處が當時此話が江戸へ傳はつて、各藩の諸侯が何うか一見したいから江戸へ取寄せて呉れまいかと云ふ事で、椎谷侯は取寄せた。評判はそれからそれと傳はり、各藩の諸侯が我も我もと見物に來る。處が椎谷は小藩であるのに毎日の樣に各藩の諸侯に成られては、伴勢だけの取扱にも困るといふ處から、遂に一案を考へ、見たいと云ふ諸侯へは此方から持て行くと云ふ事となし、蓮臺やうのものを作り、之れに載せて先方へ持つて行つたそうである、其の蓮臺は近頃まで遺つて居たけれども、現今は何處へ行つたか分らぬと云ふが、惜しいものである。

◎六奩會の命名

曾て長岡に寫眞趣味の同人が六人寄つて一團となる會があつた。其の一人と主人と知つて居ると云ふので、六人組に就て名を命じて呉れと云つて來た。時に故大久保湘南、阪口五峰なども居合せたが、湘南は『六奩會』が宜しからうと云ふ、成るほど奩は其音レンズに近きのみならず、鏡奩なる語もあり、且つ奩は綺麗な字であるからそれがよからうと云ふので命名してやつた事がある。知らず六人組の六奩會、今や果して如何。

◎近衛公と都々逸

故近衛篤麿公は霞山と號して居つた、霞

が此號はあり觸れた號で、方々にあつて中にも都々逸の作者に可なり聞こえた男もあつた。スルト頑是なき學習院の若殿原が、市中の雜誌などを見ると、霞山の號の下に都々逸があるのを見て、ウチの院長さんは都々逸を作られる事もあると云つた時は、大に困つたと公在世の當時主人に語られた。

◎酒星と人格化

吾輩は寺崎廣業と親しくして居たので、よく以前は同じく飲むものである。或る時寺崎が何んでも君の望むものを揮毫すると云ふから、吾輩はよしそれなら酒星をバーソニファイする事が出來るならば頼むと云つた。これには寺崎も困つた樣子であつたが、兎に角工夫すると云ふて約したがまだ出來ぬと見える。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎伊藤仁齋の惡文

伊藤仁齋は人も知る如く一代の大儒で、其著述の文章なども仲々立派なものであるから、仁齋は名文家だと思ふ人もあらうが、事實全くそうでない。一体に仁齋の時代は漢文の進まなかつたもので、殊に氏ば經學に長して居つても文章は拙であつた。嘗て我輩は氏の原稿を一見した事があつたが、文字の顚倒したものや、或は字を思ひ至らず、四角いものに假名をつけて置くと云ふ樣な亂雜で、版本の如き名文ではなかつた、そこで何うして仁齋がアヽ云ふ立派な著述が出來たかと云ふに、多く東涯が添削したもので、殆んど書直したものであるから、寧ろ東涯の文と云ふて差支へないものである。

◎横井小楠の權略

横井小楠は熊本の大人物として隱れなく、其詳細なる傳記は、緣みある德富蘇峰に依て出版されてある。小楠は極めて謹嚴な人として知られて居るが、實は仲〳〵權略にも富むだ人である。今其一例を擧ぐれば、彼れは深夜門生中の秀才を私かに巳が寢室に喚び、扨て今夜喚むだのは外ではないが、自分が百年の後自分の志を繼ぐべきものはお前より他にないと思ふから、私かに囑して置く事があると云ひ、自巳胸中の秘を語り、最後に必らず他に漏らすなと命ずる。サア斯うなると此門人は、數ある門生中自分が先生の鑑識に預つたと云ふので、感激措く能はず、一死以て師恩に酬ゆるの氣になるのは、人情の然らしむる所で、其後は一層師に信服して來る。處が小楠先生は、沢して一人の高足のみではない、出色の門生には皆な此の權略を弄して、乙より内と段々及ぼして行くのであるが、皆な自分一人で他へ漏らすべからずと心得て居るから、相互間には一向顯はれず、皆な擧つて先生に信服する計りであつた。如此小楠は權略を弄したもので、幸に門生中には、一死以て師恩に酬ゆる樣なものも出來た。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎僞らぬ橘曙覽

凡そ東洋人程嘘言を吐き、好むで事實と遠ざかつた誤りを傳へるものはない。日記や私乘の如き人に示さぬ性質のものでも、華を操る場合には强て事實を飾り、有の儘の事を記さぬ、況むや人に示す積りで書たものなどゝ來ては、徒らに虛飾にも努め、其時の眞の境遇や感想は到底見る事が出來ぬ。例へば貧乏人が自から貧乏の狀態を記すにも、實際の事を寫せば同情の心も起きやうに、之れを虛飾して風流らしく上品らしく僞るから、益々事實に遠ざかつて、何等深刻なる感しが起らない。然るに曾て橘曙覽の歌を讀むだ時に、初めて世に其境遇を大膽に寫す大詩人たる事を知つた。橘は松平春嶽が擧げて師となした人で、古學に通じ勤王の志深く、『文濃酒合歌集』其他の著もある。而て彼れに偉い處は、其赤貧洗ふが如き狀態と其時の感想を、微塵も僞りなく赤裸々と吟してあるので、之れには彼の自から乞食坊主を以て任じた良寛も三舍を避けざるを得まい。況んや世の紛々たる似而非文人の得て及ぶべき所ならむやである。試みに其獨樂吟の一二をあげて見やう。

たのしみはあき米櫃に米いてき
いま一月はよしといふ時
たのしみはまれに魚煮て兒等皆が
うまし〳〵といひて食ふ時
たのしみは錢なくなりてわびせるに
人の來りて錢くれし時
たのしみは物をかゝせて善き價
惜みげもなく人のくれしとき

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎獨逸のウエルヒユ

醫家の崇拜して居る獨逸のウエルヒユは醫一者にしてまた政治家たりしは誰れも知る處である。此先生は非常に政治好である處から、或友人が、君は醫者の大家であるけれども、兎もすると常軌を逸する政治論をやるので、專門の名譽を傷けるの恐れもあるから、政治だけは已めて仕は何うだと勸告した事がある。スルト先生答へて曰く、忠告は謹て感謝する、併し一言辯じたい、元來學者の事業は沈靜にして眠るが如く、政治家の行爲は躍々として勞多きが如きも、事實は之れに反し、彼れは是れに勝るの精力と勤勉とを要す、政治上の行動は余に於ては一種の慰安的休息的の事たるに過ぎず、之れが爲めに學術の研究を害するが如き患ひはないから、幸に安心して呉れ給へと云つた位の先生である。一八四八年に獨逸のある地方に饑饉チブスの流行した際、氏は政府の囑托を受けて流行地を踏査し報告書を當局に提出した。處が其結論は純然たる一篇の政治論であつた。曰く禍害の根本は疾病に非ず、黴菌にあらず、故に之れを掃蕩する根治法は到底醫藥に求むべからず、宜しく社會の組織を一變して民主政治となし、政府の非政を改善するに非ざれば斷じて禍根を斷つ能はず、と云ふ結論を與へたそうだ。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎長谷川氏の話談

長谷川泰老は非常の讀書家で、時に仲〳〵面白い說を吐く、曾て老と話次、吾輩が日本人は格物的算術的腦漿は先天的に欠けて居る代りに、哲學的瞑想的腦漿は先

天的に富むで居る、これは全く支那の儒教や印度の佛教の薫陶與つて大いに力ある事であらうと言ふと、老もこれに同意を表し、日本人の數學的頭腦を欠いて居る一例は、議院に演說をしても速記者に書かせて見るとわかる、滿足に數字を速記し得るものは尠ないと云ふたが、成る程そうかも知れん、又哲學的頭腦を具ふ

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎平賀源内の故宅

平賀源内は讃岐國志度浦の人である。自分も先年同地へ遊びし時、其故宅を訪ふた事もあつたが、其家は古びたりとは云ひ、相當の搆ひであつた。不幸にして自分の訪ふた時には主人たる人不在にて、遺物など見る事は出來なかつたが、自分より先きに友人の角田浩々歌客が其故宅を訪ねた事があつて、紀行中に内容が書いてあるから、參考の爲め之れを讀むで見やう。

志度は一世の奇傑鳩溪平賀源内の生れし地なり、町の西端、間口廣く板塀高く桂樹の枝さしかざしたる一家、古風な太き格子作り、暖簾の入口の内庭に、檜二つ三つ並べあり、舗の框近く高き角火鉢据ゑられ、帳場の傍には大福帳中の間は舗より一段高く大黑柱にして酢商平賀熊太郎と、檜板の標打ちたるは火浣布を製し電氣機械を作り鑛物を發見し本草を研究し海外通商を計畫し放屁論褥合戰等を著して朝世罵俗の筆を揮ひ、神靈矢口渡に淨瑠璃作者の名をさへ冺かしたる人の故宅にして源内の妹婿櫨太夫家系を繼ぎ爾來源内の遺法に依りて家傳の名酢を松風と名付けて商賣繁昌の間屋なり。

◎源内の遺物

浩々歌客は遺物の二三を見たとて書き來消けた中に、天神樣の一軸がある。源内十歳の時畫きたるものなりと云ふ

例の正座したる天神の顏の部は特に薄き紙（吉野紙らし）を用ひ裏には朱唐紙やうの紙に絲をつけ絲の端を紙の外に出して引き得る仕掛なり試みに絲を引けば白い天神樣忽ち赤い顏となる、源内幼時の戲れに壁上にかけ神酒を供へ頃を計りて絲を引き天神樣が醉つたとして喜べりといふ發明的研究の能力に富める奇材の幼時さもありしならんと思はる。

◎火浣布の材料

人見寧と云ふ人の隨筆に黑甜瑣言と云ふものがある、之れは當時の實狀を見聞の儘書たもので、往々傳はらぬ面白い話がある、此書は鳩溪が火浣布の材料を獲た話が載せてある。

平賀鳩溪田沼家の徵によりて千賀道流より招かれ東都へ來り品川へ至りし時は既に黃昏過ぎの事なり入舟を通りし時大なる石に躓き倒れて其面を傷く鳩溪思ふやう我欲する所ありて遙々東都へ來るに今かゝる時誼此の石こそは我心願の吉凶を占ふものなるべけれと四

貫目ばかりある石を背負ひ千賀の家へ至り名刺を投じ此頃長途の疲に氣分あしく候へば一兩日休息いたしたしとて主人へ對面もせず此夜よりかの石を守り見ると一心不亂なり翌日も食事の外は手をあざなへ無言にして是を守り見て默然たり三日目の夕方此石を携へ門前へ立ち出でしが惶の中へさぶとなげ本の座へ立ち歸り打ふしける夜半頃に至りむくと起きて又門前に至り惶中へづぶ〳〵と入りかの石をやをらかつき上りて翌朝より是を守ること又きのふのことく道流をはじめ一家是を見てみな狂人と思へり時に鳩溪鏘をかりよせ大肌ぬきになりて庭前に下り立ちかの石を二つにうち割りてはつと云ひて立ち退く、道流餘りのいぶかしきに立ち出で仔細を問へば是世に稀れなる石傷なる物火浣布を織らしむべし我眼暗くして寶を傷りとて大に後悔すのちに是を献じて將軍家の秘府に收め寶器の第十六名の件とはなれり云々

由來理學者の行動、傍人より狂なるがく見ゆるは、寧ろ其處にして、鳩溪が驗苦辛の實狀を寫し得て殊に興味を覺るものである。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎義士と字母謎語

前號に一寸引き事した黑甜瑣語に赤穗義士に就て、字母謎語の逸話がある。紀州高野山某の坊に、光臺院了覺道人と云ふ博識神通深く占トの妙を極めた人があつた。赤穗の義士吉田、原、小野寺の三人が用事あつて紀州へ至り、途次其道人の坊を訪ひ、心中に秘せし大事に就て是非とも占つて貰ひたいと請ふた。道人は、空山の老衲唯天然の無爲にまかす人に聞すべき語を知らずと堅く辭退したけれども三士また懇請して已まなかつたので、道人も默止するとを得ず、先づ三人を近つけ、一々面相し掌文を見て、沈睡する凡半時計り、忽ち四句の文を書き示した。南部北落悉痴童、塗抹何時絡作工、字母有神看所脚、一生前定在其中。

◎良雄之を判す

三士は何うしても之れが解せぬので、歸つて大石良雄に語つた。良雄は談了つて暫時の間默想して居たが、ハタと手を拍ち漸く解つたと云つて言ふには南部北落の句は面前の童子を把つて三士に比し、塗抹何時の句は道人の讖文終には其祥あらん意を述べたものである、而して字母は空海大師四十七字のいろはであるから之れを七行七字の列に書して其脚する所を看れば、「とがなくてしす」無科死すの訓となり、寃業の伏する所是を當山開基の空海の作りはじめし字母に托し、佛子前定の說によれば、我輩四十七人讐を復する彩、終に無科死すの刑にかゝらん事疑ひなしとの意であると判したと云ふ事である。此の話は、無論仮人の僞作には相違ないが、文苑の一戲事として傳ふべき價値がある。

◎讀書樂

此心を以て書を讀めば、讀むほど樂しきものはなし。

芭蕉や其角の話が出たから、序でながら俳句に就て一寸思ひ付た處を話そう。凡そ世界の韻文に於て、我邦の俳句程美しきコンデンセーションを成功したものなく、亦コンデンチーヴの美を昧ひ得る者世界中で日本人程敏なる者はあるまい。また之れと同時に俳句の流行に依り非常に事物の微細なる點に迄觀察注意を促かした樣に思はれる。西洋崇拜者流は外國人が凡ての事物に微細なる注意が行屆くと感心するが。日本の俳人の句集は精讀して見ると、動物でも植物でも、凡てに亘つて微細の點にまで注意が行屆き、時には專門の科學者をして一驚を喫せしむるものさへある。要するに俳句は、文章の美の一要素たる、コンデンセーションを敎へた外に事物の觀察と想像力とを發達せしめたる點に於ても、其効沒すべからざるものである。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎曆本と神宮

曆と云ふものは一種の圖書である、しかも出所が出所である爲め、普通の圖書と大に趣きを異にして居る。曆本は神宮司廳から發行して、其專賣權を握つて居るとは、今も昔に變らぬが、著作權だけは今は確か帝國大學理科大學に屬し、神宮には頒布を掌つて居る。於ては、印刷、製本、頒布を掌つて居る。而して神宮にては一萬二千圓の手數料を以て神宮奉齋會に下附し、三千圓を原稿料として理科大學に納めるととなつて居たが、近來は五千圓を納むる事となつたそうだ。

◎神宮の經費

全體國庫から神宮へ支出する經費は年々六萬圓位しかない、然るに神宮は一年十萬圓乃至十二萬圓なければ經常費を支辨する事が出來ぬので、此不足分は全く曆本の收入と大祓との收入を以て補塡し、僅かに收支相償ふ事を得るに過ぎぬと云ふ譯である、然るに世人は曆本や大祓の製造などは何でもないもので、それを恭しく高く賣る事、恰も彼の醫者の藥九層倍と同一であらうと思ふて居るやうだが事實は全く然らず、製造費並に頒布費等巨額に上り、約二十萬圓の總收入に對し經費は十四五万圓を要すると云ふ事だ。

◎製造及頒布

それも其筈である。先づ印刷からして八釜しい規定があつて、普通の印刷物の如く無造作にやると云ふ流義ではない。役人が嚴重に監視して一定の職工に一定の職を着けさせ、一日の中一定の時間に如何程と云ふが如く恭しく印刷する、用紙も無論專用のものを抄製し、凡て汚れを忌み恭敬の態度を以て作らせるのだ、製造方法此の如くなるに頒布法も普通圖書の如く、市中の書肆の店頭へ投り出して誰れにでも買はせると云ふ樣な事はなく、白丁を着けた特別の者に大祓と共に

略したものである。

◎芭蕉と蕪村

芭蕉の一名を桃青と云ふ、而して之れには種々の說もあるが、一說に芭蕉は李白の詩を愛した爲め、李白に對するに桃青を以てし對を遣つたものであらうと云ふ說もある。それから蕪村の名の起りに就ては、蕪村は大坂天王寺に住むで居つたが、同所は蕪の名產地である處から、蕪村の名を選むだものであらうと云ふ。

◎其角と馬琴

其角と馬琴とは其據が六ケ敷い。晉其角は前には螺舍麒角と云ひ、麒麟の角の意なりしに、後詩を鎌倉の犬巓和尙に學び「今年易傳授あり夫れより唱二其角一。易經止晉上九、晉二其角一よりし」と螺窓遺稿に見えて居る。それから馬琴の號は、曲亭とは漢書にある山の名、馬琴とは野相公の才非二馬卿一琴未能と云へる句を取つたと云ふ事は、馬琴の自筆の中に於て屢々見る處である。

◎俳句の効

威儀莊嚴に重くるしくやるので、非常に多額の經費を要し、全國に頒布する高は非常のものであるけれども、利益は意外に尠く、神宮では困難だと云ふ事である。

◎暦の取扱を改めよ

主人私かに思ふ。成る程大祓のお札は神聖なるものに相違ないから、之れは莊嚴なる形式をも要すれども、暦本は之れと性質も違ふから、簡便にやつても差支へないもので、之を改むれば神宮の經濟に於ても非常なる利益があると思ふ。徒らに舊慣を墨守するは時勢に迂なるものと謂はねばならぬ。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎三十年前の朝鮮

今日は朝鮮も我國の領土となつたが、今を去る事三十年計り前のことを聞いて見ると、大に興味がある。それは當時初めて花房男爵が公使として朝鮮に赴き談判を

た事に就て、男自からが話つた事である。男曰く、今でこそ仁川も繁んになつたが、當時は荒凉たる一漁村で、人家は僅かに十戸内外に過ぎなかつた。自分は京城の附近にて開港の要求をしたものと何處がよいかは判斷がつかなかつたので一方に談判に通ふと共に一方では港灣の調査をなし、遂に仁川を選定したものである。

◎期鮮國旗の由來

癸ゆ仁川開港の事に決定したので、日韓兩國の親交を敦うする爲め日本公使館、韓國の高等官を招待して宴會を開く事になり、粗末ながらも設備は一と通り整へた。處が茲に困つた事が出來たと云ふのは、斯る宴會に是非なくては無らぬものは兩國の國旗であるのに、朝鮮には未だ定まつた國旗がないそこで一寸思ひついたのは、王城の門扉について居る『二つ巴』がよかろうと云ふので、ボーイに命じて一夜の中に作らせて日章旗と交叉した。軈て定刻に至り客は續々來たが、二つ巴の旗が分らぬので自分に質問すると自分は之れが朝鮮の國旗であると説明すると、彼等は左樣でありますかと云つた樣な事であつたとの話。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

實業界で誰れ知らぬものなき高橋新吉が頗る色男であつた事は知らぬ人が多からう。高橋はアノ薩摩塩鯛を澤山手に入れて之れを賣つて大儲けをしたものであるが、彼れは洋行した時、西洋の或る令嬢に見初められ、遂にお定まりの夫婦約束となつた。其時若し將來兩人の間に破鏡の嘆を見るが如き事あらば、違約を申出たる方より五千弗の違約金を一方に支拂ふべしとの附帶賣約もあつた。其の中に高橋も愈よ本國へ歸朝する事となり、サア一所に行かうと云ふ事になつた。一体恁う云ふ事には、多くの場合婦人は約束を守り男子は兎角に違約し勝ちの例であるのに、之れはまた逆に來たから面白い。卽ち女の方に何か故障が起つて破約を申し出でたので、遂に高橋は女から五千弗の金を取りたる上、厄介拂ひをした譯である。高橋の如きは、金に縁のある色男と謂ふべしだ。

◎山本權兵衛伯夫人

山本權兵衛の令夫人は、其昔山本が海軍の一尉官で品川の海軍合宿所に居た頃、偶ま或樓で娼妓の候補者として買つて來た田舍出の娘を見初めて、一種の猾手段を以て四十圓位で身受けし、之れを室となし、爾來今日まで琴瑟相和して居るのである。それで、此夫人の原籍は、新潟縣西蒲原郡菱潟村大字菱潟の農家津澤鹿助の三女名をトキと呼び、萬延元年四月十七日生れで、山本に嫁したのは明治十年十二月十六日、卽ちトキが十八歳の時であつた。

◎芳崖の奇骨

故狩野芳崖の逸事は、前にも話した事もあるが、茲に又一つの話がある。芳崖は大層團十郎の藝を受し、團洲が渡邊華山を演じた時の如きは、芳崖は特に同情して見物に出掛けた。元來團洲は幾許か畫の心得もあるので、華山に扮し舞臺にて畫を描いたりして、大に氣品の高い藝をするので、芳崖は非常に盛服して見て居た。スルト團洲は扇子など何本も〳〵描

いて見物にまいた。之れを見たる芳崖は憮然として起ち、『華山は死せり〳〵』と云つて直に棧敷を蹶つて去つた。歸つてから門人に、團十郎程の俳優が猶河原乞食の根生を脱せぬのは遺憾だ。今度の芝居で全く俳優には愛憎が盡き果てたと慨嘆したそうだ。また以て芳崖の半面を窺ふ事が出來る

◎中上川の握力

故中上川彦二郎は誰れも知る如く故福澤先生の甥で、先生は常に人に對して中上川の事を劣姪々々と呼むだので、之れが中上川の通り名の如くなり、隔てなき同士間などには、オイ劣姪などと呼ぶ事もあつた。中上川は一種の春畫趣味を有して一時は長持數棹に古今の名畫を蒐めて所蔵した事もある。また彼れは優男で色男然たる風采であつたが、意外にも握力非常に強く殆んど常陸山と伯仲の間に在る程の力があつた。故に彼れの旅行鞄の如き、常人にては二人掛りでやつと持上げる程の重さのものを、中上川は苦もなく之れを提げると云ふ位であつた。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎田中舘と選擧

いつか理學博士の田中舘愛橘に逢つた時に、何かの話の序に政黨論が初まつた。スルト田中舘の曰く、吾輩も撰擧權を有つて居るものだから、衆議院議員の選擧となると、候補者から續々依頼に來る。そこで吾輩は中學生の玄關番に命じて、若し運動者が來た時には、貴君の外交意見は如何、財政上の意見は如何、陸海軍に對する意見は如何と質問させる事にして置いた。處が是等の運動に來る者は多く候補者の代人であるから、此三個條の返答が出來ず逃げて歸る。スルト玄關番が出來ず逃げて歸る。先生がまた至極眞面目の書生であるので、逃げるをモシ〳〵と追ひかけて質問すると先生の吩咐を無にしてはと云ふので、先生の吩咐を無にしてはと云ふ譯で、終には吾輩の處へは選擧運動者が一切來ぬこととなつた。然るに或時一人來たので、書生が例の通り三個條の質問をすると、其人は、無論說はあるが兎も角先生にお目に掛つてから述べると取次がせたのを見ると、之れは田口卯吉自身出掛けて來た譯で、それから逢つて種々の談話をした。吾輩は田口だけは氣に食つたネ……。

◎露伴と和讃

いつか露伴を墨堤の居に訪ふた時に、彼れは書齋から、二三百枚計りの原稿樣のものを示した。何かと思へば之れは各宗の和讃及び其目錄と解題であつた。自分も大に驚いた。成程露伴の如き凝り屋でなければ恁んな事はやるまいと思つて、一寸調べて見ると、二百種位もあるので驚いた。全体恁んなものは書籍目錄にも記載されず、また書店にもないもので、書籍商人等が普通一括して『ゴミ』と稱する雜物中に偶然あるもので、三枚や五枚は兎も角二百種とは實に驚くの外はない。露伴曰く、和讃と云ふものは、永い年月の間多數の人に謠はれた宗教的の詩である、宗教詩は他にも種々あらうが、最も多數の人に謠はれたものは和讃に如くものはなく、また中には良く出來たものがないでもない、然るにムザ〳〵之れを煙滅せしむるは遺憾だと思つて初めた、蒐めて段々研究して見ると失望した、ナゼと云ふに書いてある事柄は色々あるけれども、調子は悉く七五調にて、別調のものは殆んどない事だ。併し和讃は兎も角捨つべきものではないと思ふ、との話であつた、之れは實に露伴の說の如くである。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎祝阿彌の料理說

蜀山人の俗耳皷吹に祝阿彌の料理の說がある、それには斯う云ふて居る。『白人料理、佳々則々矣、但恨美味累々、腹中飽滿、故料理以下不レ飽三鵝中一不レ厭二口中一上爲レ要』と、これは如何にも名言で、單り料理に就て名言とすべきのみならず、繪畫か演說などのごときものでも、餘り美味をこて〳〵一回に出し盡きると、却て全体を破るの憂がある、而して此の憂は白人にありかちであることも、矢張祝阿彌の言ふ通りである。

◎望陀欄の有樣

祝阿彌と云ふは明和の頃江戸第一等の料理屋として、貴人や通人に持て囃された望陀欄の主人である。望陀欄は俗に桝屋と云ふた料理屋で、京山の蜘蛛の糸卷に書いてあるのを見ると、なか〳〵麗酒れた家であつたことがわかる。明和の頃深川洲崎に桝屋祝阿彌と云ひし料理茶屋亭主は剃髮にて、阿彌といふ名をつけしは京都丸山に倣ひたるなるべし此者夫婦人の機を見る才ありて然かも好事なりしゆゑ其住居二間の床高麗縁長押作り側付を廣敷とし二の間三の間に塵しきをかこひ、中の小亭又は數寄屋、鞠場まであり庭中はをして知るべし雲收の御隱居南海殿おなじく御當主の御次男雪川殿しば〳〵爰に遊び給へり此兩殿は其頃の大名の通人なり雪川殿のかくし紋此の如く、川と云ふ字の羽織名ある太皷持は着さるはなし桝屋祝阿彌、件のごとき大家ゆゑ、諸家の留守居者の振舞といふ事みな桝屋を定席にせり其繁昌今比すべきなし廣座敷に望陀欄の三家を鑄物になし地は呂色、緣は蒔繪、四角に象眼かな物大さ六尺ばかり漢書にて南海君の祝阿彌へ賜ふゆゑよし二百字ばかり記しあり云々

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎八百膳の茶漬

序に八百膳の事も話そう。八百膳が客から高い料金を申受け、客を驚かしたと云ふ話しはよくある話であるが、寛文天保頃の事をよく書いてある、寛文見聞紀には斯う云ふ一話が載せてある。

享和の頃淺草三谷ばしの向に八百善といふ料理茶屋流行す深川土橋に平清、大音寺前に田川屋是等は文化の頃より流行せし料理屋也或人の噺に酒も飲あきたりいざや八百善へ行て極上の茶を煎じさせて、香の物にて茶漬こそよからめとて一兩輩打ち連て八百善へ行て茶漬飯を出すべしと望みしに暫く御待

有べしと半日ばかりもまたせて、やう〳〵かくやの香の物と煎茶の土瓶を持出たり、かの香の物は春の頃よりいと珍らしき、瓜茄子の粕漬を切変ぜにしたる也扨食をはりて饌をきくに金壹圓二分なりしと云ふ、客人興さめていかに珍らしき香の物なればとてあまりに高直也といへば亭主答て、香の物の代はともかくも茶の代こそ高直なり茶は極上の茶にても一ト土瓶に半斤は入らず茶に合たる水の近邊になき故玉川迄水を汲に人を走らしたり御客を待たせ奉りて早飛脚にて水を取寄せ此運賃莫大なりと申ける云々

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎蓮如の御文

蓮如上人の御文は皆な名文で、朗々誦すべきものだが、就中白骨お文の如き其尤もなるもので、一讀三嘆の妙がある。嘗て或る書を讀むだ時に、痩竹主人と云ふ人が此文章を漢文で評したものがある、本文の妙をよく摘指して居るから左に抄錄して置かう。

夫人間の浮生なる相をつら〳〵觀するに

我やさき人やさき、けふともしらずあすともしらず、おくれさきだつ人はもとの雫、末の露よりしげしといへり

短句連下、承以餘滴悄然、長句方是白雨覆盆、屋壁皆鳴、戶震耳鳴、曰

矣一語頓挫、雨聲忽然而止、先秦古文押韻、有出於自然者、如我先人先類句亦然誦之鏗爾

されは朝には紅顏ありて夕には白骨となれる身なり

動風吹過一陣遶檐、琴筑忽爾絕響、只闖破窓紙片皆發、飄飛吹收上起下是風說世間下是專說一人

すでに無常の風きたりぬれば

雨聲又起

すなはちふたつのまなこたちまちにとぢ、一の息永くたえぬれば紅顏むなしく變じて

以紅顏走、顯前

桃李のよそほひを失ひぬる時は六親眷屬あつまりてなけきかなしめども

雨絲蠕々不絕點滴、直瀉自檐遶地、如掛水晶簾

双眼一點俳句映帶取趣是王翰四六遺意、猶韓文富澹處猶有文選遺意

更に其甲斐あるべからず

一句頓挫、雨脚斷雲色白

さてしもあるべき事ならねばとて野外におくりて夜半の烟となりはてぬれば

雨意既盡、微風光々起自池蘋之末、柳陰稍暗處、猶透看雨片絲飛如毛

たゞ白骨のみぞのこれり

起得悲壯急雨將至、暗雲慘澹、先聞黑風山川草木颯颯悲鳴

おほよそ(以下數句引後鳥羽院無常歌)

はかなきものはこの世の始中終まほろしの如くなる一期なり

疎雨幾點、大如碁子、撲屋有聲

されはいまた萬歲の人身をうけたりといふことをきかず、一生すきやすし、今にいたりてたれか百年の形体をたもつべき

雨點漸密、一生易過、短句斜挿有橫風吹斷雨聲漸歇之況

風力乍疾、庭樹枝葉片々皆鳴、葉上露滴、一時擺落壓亂作響

以白骨收前

一振掉而止、譬猶驗者唯咒文畢、錫杖撞地銷然有聲、又猶力士上場張脚、肩背與頭髻、皆憾搖

あはれといふもなか〳〵愚なり

白骨句截絕大促、更添此一句、便搖曳不盡、零露滴々墮在池面、渦紋灑縈廻成趣

されば人間のはかなきことは老少不定のさかひなれば

雲色益白、池面生光々、慘澹已去、歡境將來、宛如嬰孩啼號見母乳、即破顏一笑、睫間瞼上滴殘晶淚却增可憐痴態

たれの人もはやく後生の一大事を心にかけて阿彌陀佛をふかくたのみまゐらせて念佛もうすべきものなり

雲破暗處紅日漏輝、庭柳池面的礫映發、倒射之影高在于紙上

あなかしこ〳〵

只是通常歇語覺一唱三歎全音達梁之妙

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎郵便配達の祖元

嘗て前嶋男の話る處に依れば、男は維新匆々の頃志を起して今國の沿海を踏査された事がある。而して其踏査の趣旨は當時海防論の盛になる時であつたから、實地に就て大に研究しやうと云ふ考へであつた。併し男も當時は一介の書生で、豐富なる旅費の準備もなく、行く先々へ添書を貰ひ、卽ち添書々々で全國の沿海を踏査した譯である。併し其結果海防論に就ては格別の名案も出なかつたが、後年驛遞頭となり全國に郵便制度を布く時には、地圖を一見すれば歷然として指點すべく、些の滯なく着々實行する事が出來た。卽ち海防策に得ずして郵便制度に得たものだと語られた。吾輩は此時、あなたは郵便の元祖で居らるゝが、また添書々々で始終歩るかれたから、配達の元祖とも云ふべしだと云つて、共に一笑した事がある。

◎壯士の名詞

壯士と云ふ者は政治の激爭から生れた一種の産物で、一つの勢力と認められた時機があつた。此の如く一種の勢力を認めらるゝに至れば、それが一つの名詞となる。此名詞は獨て外國にも認められたと見え、新らしいウエプスターの字書にも記載され、また日露協商第一條朝鮮の取締に關する條項にも壯士と云ふ字が見えて居る。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎伊藤公の功德

故伊藤公嘗て烏森の桝田屋に於て、女將等を相手に氣焰を吐いて曰く、世間では吾輩が好色だと云つて種々非難するものもあるが、之でも時たま人の知らぬ功德を施す事もある。今の毛利の當主元昭公は、先年尾張の德川家から室を迎へられた。處が夫婦の間に折解けた樣子がなく三年の後遂に離縁の沙汰となつた。そこで吾輩は其原因に就て公の近侍に探らせた處が、公爵は全く男女の關係を知らない事を偵察し得た。そこで吾輩は公に面會して、極内で其秘密を尋問に及んだ處が、公は眞面目になつて、斯んな事はまだ經驗がないから知らないと云ふ。吾輩は大に氣の毒に感じて公をこつそりと富貴樓へ連出して、お倉に命じて仁藏と云ふ老妓を侍らせ、初めて公は男女の道を知られたのだ。其後に迎へられたのが三條公の令孃卽ち今の夫人で、仲々睦ましくして居られる……何うだいと云つて笑ふ。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎千蔭の豪奢

假名書と和歌とを以て有名なる加藤千蔭は町方與力即ち今日の所謂警部と云ふが如きものであつた。然るに其時代の陽氣サ加減は、歌道筆札を能くする程の餘裕のある事でも分かる譯である。彼れはまた非常に豪奢のもので、當時藏前の札差連中などを中心として十八大通なるものがあつたが、千蔭は實に其一人で、頗る新案を凝らし、自作『竹葉鶯』の歌の假名書を緞子の帶地に織らせ、吉原や深川の方へ盛んに流行させた事もある之れが當時の警部であると云ふには驚くの外はない。

◎山川と奥平

九州大學の總長に任せられた山川理學博士は、もと會津藩の家老の次男で、奉直清廉にして學殖高き大家であるが、また一面には極めて豪放磊落なる大酒家である、博士は自分等が大學在學當時物理學の教師で、それこれの關係から時々博士を訪ふた事がある、するとイキナリ三升入位の貧乏徳利を取出して、茶の代りだと云つて飯茶椀にナミ〳〵と酒を注いで呑ませ、また自分でもガブ〳〵呑むで快活に談ずると云ふ風であつた、當時常に床には奥平佐正の落款のある書幅が懸つてあつたが、博士自から奥平は予の恩人だと云つて居つた。何でも會津の陷つた時、奥平が山川を救つて保護したそうである。山川を知り奥平を知る自分に於ては、山川の性行が幾分奥平に似て居る點がある樣に感ぜらるゝが、恐らく山川も幾分奥平の薫陶を受け、之れに私淑したものであらうと思ふ。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎樂翁と提灯行列

現今何か大典があると必らず提灯行列をして祝するのが例で、之れは日清戰役前後から專ら盛んになつて來た。ソコで世間の人は、之れは西洋のカンテラ行列などゝ思ふて居るものがあるが、白河へ行つた時に、偶然にも之れが古く樂翁に依て創められた事が分つた、樂翁は、當時天下泰平であるけれども、一朝有事の際には領内は町人と雖も起たざるべからず、就ては何等かの機會に全市共同の步調を取る練習を要すると云ふ處から、毎年九月十三日の鹿嶋祭りの夜は、各町の壯丁何歳以上は悉く提灯を持ち、一町毎に年齡に依て大小の差別を附し、一令の下に何千何萬の人衆が隊伍を組み全市を行列し、樂翁の經營せし南湖を一周して歸町し解散すると云ふ掟を定め、爾來年々替はる事なく、今日迄行ひ來つて居るのである、自分等の白河に遊むだ時、幸にも其祭典に遭遇し、全市の壯丁が各町内毎に標しある高張を先導に、幾萬の提灯之れに續き時間を違へず隊伍を亂さず、肅々として全市を練り、南湖を一周したる光景をし親しく湖畔に於て觀覽し、頗る壯快に感じたのである、要するに提灯行列は、今新らしく工風されたのではなく、既に樂翁時代に創められたもので、一面尚武の氣象を發揮せしむべき思慮からであらうと思ふ。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎一六の苦心

故一六居士は才氣縱横にて、紙を展べて筆を下せば自から字の位置をなすと云ふ如何にも老練な事は誰れも知つて居る處

で、從つて世間の人は一六は何等の準備なくも字が書けるものと思ふで居る。處が沒してから息の連山人等が日記や手帳を調べて見ると、決して不用意處ではなく、少さな袖珍本体の手帳に、字割を種々にやつて居つたものを幾つも發見した。名匠は如何に天才であつても苦心の存するもので、其苦心の爲めに外面からは無造作に出來るものゝ樣に見えるものである。

◎菱湖の用意

卷菱湖に就ても同じい樣な話がある、菱湖は達筆な人で、越後には幟なども澤山ある。一体幟の如き大きなものを書くには、猶更ら豫め字割をする必要があるのに、菱湖は一向に準備の樣子もなく、チヤンと位置が出來ると云ふので、世人は皆な驚いて居た。しかも事實決して不用意ではない。曾て幟を頼まれた時に、宜しい承知した併し前祝に酒を出しなさいと云ふ譯で。字を書くべき場所へ到り、切りに大白を擧げ、酣能淋漓として歸つた。處が先生醉ばらつて紙入を忘れて行つたので、何心なく開いて見ると何時の間にやら小さな紙に、此室の畳割が寫し取つてあるので、ハア……前祝に假りて此座敷を見て字割をしに來たのだなと云ふ事を合點し、其用意の周到なるに敬服した事があるそうな。如何に豪放の人でも、名人鉅匠の苦心は恁う云ふ處にあるものである。

◎平河町の同調會

一六の話が出たから序でに今一つ話そう一六が雅名を附するに妙を得て居る事はいつかも云つたが、之れは實に天品であ

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

▲新潟の昔譚（上）

去廿四年中、新潟の鈴木長藏氏と話次、長岡領たりし新潟が天領に取上げられたる顚末を聞き當時其大略を書きつけ置きたるものを發見せしを以て思出草に左に掲げむ。

◎新潟の唐物事件

新潟は元長岡藩のものであつたのを、天保の慥か十五年と覺えます、今で云ふ密輸入一件からお取上げになつたのです、其密輸入と云ふのは當時八ケ間敷かつた唐物事件といふ騒動で、此唐物事件に付ては既に私共の祖父始め町中の重立たもの十一人が江戸まで送られて御處刑になつた事もあるのです、此事件に付前田正名さんから聞いた事もありましたが、元の起りは薩摩からであります。

◎麑島の財政

天保年度以前の麑嶋藩といふものは實にそれは非常な貧乏で、とても天下に雄飛するなどゝは思ひも寄らぬ事であつたそうです、處でこんな貧乏でも仕方がない、なんとかして之を富ます事を工夫しなければならぬと、思案に思案を重ねた末に圖師庄左衛門といふ人が出て、琉球で支那と密貿易を始めたのです。

◎昔の海外貿易

昔の海外貿易といふものが莫大もない利益があつた事は今日からでも想像される話しで、例の足利義滿が金閣寺まで立て東山の贅澤を盡したものも全く支那との貿易からアレ丈の金が手に入つたのですから、それを秘密に運上……今の海關稅を取られずにやるとなれば儲けになるには違ひない、其お蔭で今日薩長などゝ云はれる樣になつたのです。ソコで秘密輸入はしたが品物のハケ口には閉口した。

◎新潟に來る

それで其輸入品を、バカすのには成丈邊鄙で人に知られない處、といつても先方に金がなくては差引が出來ないから金のある人に餘り知られない、そして幕府の役人の氣のつかぬ港をと尋ねた揚句に、とう〳〵其密貿易品を持て行く處に此新潟を見付けました。デ、或年……天保の七八年頃でしやうナ薩摩の船が大坂に行く途中、シケられたと云ふ觸込で、始めて新潟、其秘密に輸入した品物を積込で入て來た、それは皮切にして後は薩摩は琉球で輸入してドン〳〵新潟に持て來る、其て來たものは又新潟から諸方へ廻すと云ふ仕組で、盛んに此處で密貿易を始めたのです。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

▲新潟の昔譚（下）

◎會津から發覺

處が惡事千里と云ひます通り、間もなく此事が幕府に聞こえたので、一体其時の重な品物といふのは漢藥、朱、陶器類であつたのですが、御案内の通り會津は漆器の製造が盛ですから、其中の朱は重に皆會津に送つて朱塗ものに使つた、其密輸入した安い朱で出來た塗物が江戸に出ても亦不思議と割合に安いと云ふ處から此處で密輸入をやつて居ると云ふ事が發覺したのです。

◎十一人の處刑

一ト通りは解ても今のやうに直其罪人を獄舉るといふ譯には行かない、先づ色んなものを入れて、すつかり探索させなければ容易に手を下せないので、お庭番であつた河村清兵衛が奉行になる前、此處へ來たのも此隱密の爲だらうと思はれる。何から何まで探索が行屆いて擒舉られたのが十一人、十一人は早速駕で江戸に送られる、それと同時に長岡藩の不取締からこんな事が起つたといふので此地を御取上になつて天領にされたのである、扨て江戸へ送られた十一人は、先づ新潟では重立つもの計りで私の祖父……金右衛門と申してモウ先年物故致しました……も其中の一人でありました、至嚴鼎の幕府の掟では密貿易といふものは、大層重い罪科であつたのですが、ドウ云ふ譯で有たか此唐物一件は存外輕く濟むだ、一番重いものは遠嶋中になくなりました……が、其次は半年も牢舍して居ましたらうが、私の祖父は身代三分の一の科料で御

早稲田大學圖書館

許になりました。

◎高野長英と識る

祖父の直話ですが、祖父が江戸に送られて傳馬町の獄屋に入られた時は、丁度アノ牢屋の燒けました一年前で、例の有名な蘭學者の高野長英が其牢頭であつたそうです、私共は牢屋の事は一向知りませんが牢頭といふものは恐ろしく巾をきかしたもので、疊を何枚も積むで其上に安座して居るといふ見幕だそうで……、處が祖父が一寸碁を打ちましたので不思議にも高野とは合碁であつたそうで、ひどく高野に可愛がられて牢の中に居たのも僅か三日で、四日目にはハヤ出る事が出來たのですが其間は少しも牢屋の苦を知らずに碁ばかり打つて居たそうです、出る時に高野はお前の出るのはおれには困ると云ふたそうです。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎名古屋の大惣

昔は公共的圖書館と云ふものはなかつたが、併し稍〻其形を爲したものはあつたので、即ち大きな貸本屋が是である、貸本屋は東京は申すに及ばず、全國到る處の大都會にはあつたが就中其大なるものは名古屋の大惣つ大野屋惣兵衛)であつた。大惣は馬琴が宿泊した緣故もある事は其雜記中にも見えて居るが、元祿あたりから珍本其他何萬卷を蓄ひ所謂軟か本の性質のものは殆んど備はらぬものなく今日其方の趣味家が一冊五圓十圓も出す類のものが何萬卷もあつて、其道に於ては全く日本第一の大貸本屋と云ひ得た譯である。然るに世の變遷につれて今より十七八年前、書籍一切を賣拂ふ事となり、終に二三個所に分れて散佚したのは、單り大惣の爲めに惜むべきのみならず、名古屋の爲めに惜むべき事である。

◎文豪逍遙を出す

併し此大惣が二百年來此書物の爲めに、如何に幾万の人に薫陶感化を與へたかは容易ならぬもので、特に此貸本屋から天下の大文豪を一人出す事が出來たと云ふ事は沒すべからざる功績である。それは坪内文學博士である。坪内君は名古屋の出身にて幼少の時には殆んど毎日大惣に書物を借りたり返したりする事を日課として居た人である、自分は坪内君の學窓時代に、君の讀むだ本の目錄を見た事があるが、それでも何千種もあつた。君をして文學に志さしめ、竟に今日の如き大成を見るに至らしめたる事は、固より種〻の原因もあらうが、大惣の珍本が與つて力ある事は爭ふべからざる處で、大惣もまた二百年來幾萬の書籍を藏せし爲め此大文豪を生ぜしめたる以上、殆んど遺憾なき事であらう。

◎學文路

高野山へ登る人は誰れでも山の半腹頃に學文路の地名ある事を知つて居るが、之れは其文字の如く、野山の隆盛時代幾千の僧侶を敎へた學寮が此邊にあつた處から、此名がついたので、學校町なんとには最も適當な面白い名である。嘗て大隈伯が初めて今の牛込の早稻田大學へ通ぜられ、親道を開かれた時に、伯は其町名を命ずるに就て、我々に諮問された事があつた、其際に此事に思ひ當り提議しやうと思ふ中に、行違つて間に合はなかつたのである。

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎貝原益軒

德川時代の儒者中に於て、西洋風の學者は誰れであるかと言へば、先づ貝原益軒を推さざるを得ない、自分は最も益軒を崇拜するものであるが、翁の傳を讀む毎に恰も西洋の學者の傳を讀む如く覺え、日本儒者の傳の如き氣がせぬ、蓋し翁の着眼と行動とは如何にも西洋の學者風で幾百千の儒流に卓越するもの全く此點に存するのである。試みに一二の例を擧げて見やう。當時階級思想が熾んで大抵の學者は高級の國民を標準として書を著はす、即ち士大夫の爲めに書を著はすものとみて、億兆の蒼生(會の平民を敎育感化する目的に依て著述するが如き特志家は寥々曉天の星の如しであつた。然るに益軒は彼が如き博學の材を以て、眼を此點に注ぎ、當時學者が潔しとせざる寧ろ或意味に於て不見識とした假名文を以て平易の書物を著はしたのである。益軒は如此假名文を弄せし爲め、所謂支那の糟粕を嘗むるに汲々たる腐儒者流や貴族には見捨てられたが、最も多數にして最も大切なる國家の源泉たるべき平民敎育には千歲沒すべからざる功績を擧げたのである。

◎十訓と女大學

曰く『家道訓』、曰く『養生訓』と云へるが如く、有名なる益軒の十訓は、平易なる文字の中に、實行的の大敎訓を寓したる敎科書で、何人にも消化し理解し得るものである。就中家道訓、養生訓の如きは西洋の敎育制度に近かいと言はなければならぬ。加之翁は女子敎育を思ひ立ち其夫人をして女大學を書かしめ、幾十年間我國婦人敎育の寶典たらしめた功は沒すべからざるものである。尤も翁の夫人は東軒と號し、學問もあつた人であるから、女大學は夫人の筆には相違なからうが、翁の指圖に出た事は明かである。

◎益軒夫妻の行動

更らに益軒夫妻の行動に就て見るに、是亦傳ふべきものである。翁は殆んど全國を歷遊したが、常に西洋風にて夫人同伴で、道すがら藥草などを摘みながら笑ひ興じて歩き、旅宿に入れば夫人が日記を書き、且つ途中にて蒐めたる藥草の整理を分擔した等と云ふ事は、全く西洋人に異ならぬ。益軒は敢て西洋人を學むだものではない、併し人其極致に達すれば東西其揆を一にするものたるは、益軒に於て証する事が出來ると思ふ。

早稻田大學圖書館

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎馬琴と山陽

馬琴は一種の史家である、稗史野乘に托して書いた一種の史家である。馬琴も初期に於ては世の作者の如く、單に狂言綺語を弄した時代もあつたが、晩年には多少歴史的の考へを起し、白石などを崇拜し、また八犬傳、朝比奈巡嶋記其他南朝派の稗史を澤山書いて居るのは、歴史趣味を平易に記述して暗に幼稚な人々の頭腦に入れたいと云ふ事を考へた事に相違ない。而して山陽は當時日本外史を著はしたが、馬琴は山陽と相見る機會はなかつたけれども、日本外史を愛讀した一人で、其才識には敬服して居た樣である。一説に山陽は硬い文字を以て歴史を行るべし自分は軟かい文章を以て歴史を書くからと云ふ見識よりして、外史等も愛讀したと云ふ説もあるが、之れは必らずしも想像説のみではないと思ふ。

◎日本外史の寫本

此點には多少証するに足るものがある。當時馬琴の朋友たりし讃州高松の家老木村默老の藏書中に、馬琴が木村に贈つた日本外史の寫本がある。之れは馬琴の自筆ではないが、同紙には『日本外史、瀧澤文庫』なる文字ある罫紙迄作つて寫させ、跋は自筆で書いてある。之れを讀むで見ると、常に豪宕にして他を推稱せぬアノ馬琴が、外史には敬服の意を漏らして居る。これは馬琴が自ら藏する爲めに作つたのを木村に贈つたもので、是等を綜合して考ふれば、馬琴は小説綺語に托して歴史を行ると云ふ考へであつたと云ふ説は、一概に排斥する事は出來ぬと思ふ。尚此寫本は現今高松の黑木氏が所藏して居る。

◎抱一の舊宅

酒井抱一上人は根岸に住つて居た人であるが、其舊宅は嘗て自分の親戚が買求めて別莊にして居たので、自分も一二度見た事があつた。此家は頗る荒れては居たが、流石に幾か昔の俤も殘つて居たので、多少の感興を禁じ得なかつた。傳ふる處に依れば抱一が吉原の某と云ふ全盛の花魁を根引し、來たつれて來たのが此家で、久しく其妾が口言葉の『そうざます、なんざます』など云ふなまりの失せなかつたと云事だ、又時に酒井雅樂頭が大勢の伴勢にて根岸のアヤ〻通りを堂々と行列して此家を訪ふた事もあるそうで、其等の昔を回想すれば多少の趣味があつた。不幸にして此住居が、先年大災に罹つて失せたのは我が親戚の爲めのみに止まらず、名人の遺蹤の爲めに惜むべき事である

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎浮世繪の人物

浮世繪と云へば浮世又兵衛以來澤山あつて、元祿頃は其隆盛期と稱せられて居たソコで今日其人物畫を見ると、美人の如き今日の考より見れば、全く畫家の勝手次第に書いてものゝ如く、マサカ此樣の人間が事實あつたものとは見えぬ樣である。躰格、面觀、衣類の着こなし、紅粉の塗り方など、繪師が作つたものと疑はれる。併し飜つて考ふるに、當時實際に遠いものであつたら貴ばれまい、殊に浮世繪は多く寫實であるから實寫したものに違ひない、違ひないとすれば、今日の婦人と非常の懸隔あるに驚かざるを得ない。之れには何かの原因がなくてはならぬ。暫らく吾輩の考ふる處に依れば、今日に於て俳優演劇等が風俗を作る源泉たるが如く、昔も同樣であつた。元祿時代にはまだ盛んに人形を舞臺に出した時で人形が風俗美の源泉となつた、活物の人

早稲田大學圖書館

雙魚堂錄話

雙魚堂主人談

◎坪内博士と振り

坪内博士は殆んど一生中最後の事業として理想通りの演劇をやりたいと苦心し、近來は邸宅の半ばを稽古所に充て俳優を養成して居るのは隱れもない事で、藝術の爲めに献身的に盡すのは實に感すべき事である、ソコで世間では坪内君は劇の講釋はしやうが、『振り』などは先生自身かするのではなく、誰れか其道の專門家にやらせるものであらうと思ふて居るが事實一切の『振り』は皆なアノ人の工風に出るものだと云つたら、意外の感に打たるとであらう。成る程坪内君は花柳からでも藤間からでも踊り一つ習つた事もない。併し坪内君は全く心の作用から案出する振りで、即ち脚本の文章を振りに顯はす譯であるから實に貴ぶべきものである。處で流石の人も窮する場合もある、それは西洋の脚本などとなると、何うしても日本人の表情や働作では滿足に顯はし得ぬ事がある。

◎活動寫眞の研究

坪内君は近來切りに活動寫眞の見物に出掛ける、ソコで之れは小兒でもつれて行くのかと思ふて居た處が、實は研究に行くのであると聞いて大に驚いた、仔細は日本に於て座が西洋の演劇を見むとせば、活動寫眞に依らざるを得ない、活動寫眞には西洋の演劇が多いから、之れを見れば尠くとも手足の動かし方、表情の、やり、ッぶり皆な實地にやつたものであるから、坪内君が之れを參考として研究すると云ふ事は最もな譯である、加ふるにアレ丈けの人の見るのであるから、聊かのヒントを得ても大きな働きをなすのである。嘗て一回も西洋の地を踏ます、西洋の演劇を見ざる人にして、西洋人をアッと言はせると云ふは坪内君を措て他にあるまいと思ふ。

◎驚婚

嘗て支那の或天子に色を好み、民間の容貌秀麗の女子あれば直ちに之れを徵召するので、之を恐れて婚期に達せざるも早婚をしたので、時に之を驚婚と名つけた事がある。我國に於ては德川家齊公は大の兒福者で六十四人あつたので、諸侯の顏さへ見れば養子を遣はさうと云ふ、諸侯の方では將軍家から養子を貰ふなら、莫大の費用を要するので、急いで早く他から養子を迎へたと云ふが、これまた我國の驚婚と云ふべしだ。

人形振り

間が活動ならざる人形に眞寫して一種の人形振りが盛んに行はれた。手つ取り早い例は當時の小兒などは、全く人形の通りに作つたもので、警にも美なるものを人形樣のやうだと云ふ事など、恐らく其時分から來た型であらう。卽ち人形から學び得たものであるから、今日に於て解すべからざるものあるは寧ろ當然の事である。乍去人間が人形に眞似た計りではない、人形の方でも人間の流行にはまる樣に努めた爲め、人間と人形、相錯雜して一種の風俗を作つたものが、所謂浮世繪風俗である。斯う考へて見れば幾らか解釋がつく樣である。

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館

以下
43丁
白紙

早稲田大學圖書館
早稲田大學圖書館

蜃泡錄（苣）

▲隱れたる圖書の調べ（一）

市嶋　謙吉氏談

◎日本の書物と云ふものは、全体どれたけの數があるか、之れは殆ど取り調べに苦しい問題である。先づ帝國圖書館に四十万ある。上野圖書館に三十万はあると云ふ話し、内閣の文庫には三十万位あるたらう。水戸の彰考館の本とか、加賀の松雲公の集められた書物とか、大華族の文庫とか、各寺々にあるところの書物とか、又全國のあらゆる圖書館や、一個人の持つて居る書物とか、斯う云ふものを集めて見たら、太したもので、何千万といふ數を數へる位であらうと思ふ。

◎假しながら其中、日本の圖書と云ふものたけは　　の位あるか、決して少なからぬもので有らう。勿論圖書と云ふのは廣い意味で云ふのであつて、決して版にして、製本されたものばかりを云ふので無く、古い時代の記錄とか、日記とか、帳面とか、又は一枚々々になつて居る証文や、手紙なぞをも包含するので、斯の如くに區域を廣めて行つたならば、いよ〳〵澤山になるに違ひ無い。

◎そこで是等の書物の中で尤も大切なものと云ふのは、如何なるものであらうかと云へば、或意味に於ては、版本で無いものに却て在ると思ふ。版本は世の中に流布して居るから、是等は幾らもあり、又版が存在して居るから、再び出版する事も出來るが、寫本の部類に到ると、概ね一つしか無いから、其一つを無くすると、其れつ限りになつて終つて、モー再び得る事が出來ないと云ふやうなものが隨分あるたらうと思ふ。

◎殊に昔或事情のもとに秘密にされて居る書物があるが、是等の部類に其れが多くある。寺の方面から云ふと、眞言宗の書物と云ふものは、眞言秘密と云つて、人に見せないである。其れで多くは書き殘されてあるもので、其宗旨から云へば非常に貴重なものた。是等は佛教の研究には尤も大切である。

◎華族の方面からは、昔の公卿華族の如きは夫れ〴〵儀式なぞを司る所が定つて居るので、儀式、典例を心得て居る家幾軒もある。其れ等は其爲に飯を食つて居たのたから、其家に取つては大切なものであつて、苟くも人に示さない。故に此部類にも澤山ある。

◎其他すべて藝術の點に就ても、其奥義があつて、其れに關係ある書物は其家に秘密に藏せられてある。是等は皆版本でない。悉く寫本である。たから大切な物が却て版本で無い方面に隨分ある。

◎斯う云ふ部類に屬するものが、世が變ると共に、所藏して居る者が賣つたり、反古にしたりして、失せる數が隨分多いと思ふ。（在京記者）

蜃泡錄（苣）

▲隱れたる圖書の調べ（二）

市嶋　謙吉氏談

◎此大切な寫本とか書類が世の遷り變りに際して所藏して居る者が知らずに、反古にしたり賣つたり、人にそゝのかされて奪られたりして、無くなるものが澤山ある。丁度明治維新の、時代の遷り變りには万事万端舊い物を打破すると云ふ狀態であつたから、是等の物は大方は二束三文に棄られて終つた。其捨てられた數は實に夥しいもので、其數は幾十万であるか計り知られない。

◎此部類の物が海外に甚たしく輸出された事も少くない。外國では近來東洋研究がなか〳〵盛んになつて、しかも其研究者の眼は恐しい。日本人よりも高い眼を持つて居るから、日本人が是等の部類の物を重んじて居ない時に乘じて、日本へ蒐集に來た。其爲に奪り去られた書籍や文章の類が實に夥しい。外國へ遊却た人が、外國の大圖書館に、日本に稀れな日本の貴重の書物が澤山仕るのを見て、一驚を吃すると云ふ譯だ。

◎是れは實に殘念な事で、或は失せ、或は奪り去られたと云ふものゝ中には、唯一とも稱すべきものが澤山ある。今日になつて取返しが附かぬものが隨分ある。之れは甚た遺憾な事だ。

◎けれども現在殘つて居るものも決して少くない。今日では日本人も其處に氣が付いて、無暗に賣つたり、失つたりはしないやうな傾向を現はすやうになつた。併し未た油斷はならぬ。少し態裁が惡かつたりすると、直ぐ反古紙として、使ひ捨てゝ終ふ。

◎今にして是等を保存する事を計らなかつたならば、復た世の變遷に際すると、將來失せないものでも無からう。故に差し當り、之れを保存する方法を考へねばらぬ。夫れには二つの方法がある。

◎一は、及ぶべくは成るたけ其れを版にする。しかし乍ら其れを悉く版にすると云ふ事は六ケしい事だ。誰れも讀みたがると云ふ物で無いければ、出版は出來ない。夫れで有るのに、前に言つた書物や文章は大切は大切だが、版にならぬものが澤山ある。又何百万、何千万と數へる寫本、文章と云ふ類を悉く版にする事は到底望み得られない。

◎夫れなら、モー一つの方法は、總て寫して副本を作つて置くも、貯藏の一手段である。併し乍ら之れも亦容易の事では無い。全部を那麼事するのは、なか〳〵出來ない。不可能の事である。

◎又版にするにしても、寫すにしても、どだい其實物が何處にあるか、今日に於ては頗る不明である。之れを搜索する事が頗る難儀で、人の倉に秘されてあるのだから、容易に知れない。夫れで版にするとか、寫すとか云ふ事は、急に實行出來ぬ事である。（在京記者）

蟹泡錄

（芸）

▲隱れたる圖書の調べ（三）

市嶋　謙吉氏談

◎其れで第三に今日行はれる方法として先づ以て何處に何う云ふ本があるかを取調べて置く事である、之れは何んの造作もない事で、即ち何んと云ふ本が、何處に在るかを調べて置くのである。勿論出來得る限りは、今日から副本を作つたり版にしたりする。是れは一層宜い事で、無論勉むべきであるけれども、先づ以て今日容易に實行さるゝ第三の方法に着手するが急務である。

◎成る可く版にして置くと云ふ意味で、自分は國書刊行會と云ふものを始め、書物屋が營利的に出版の出來ない本であつて、しかも埋沒させる事の惜しい大切な物を選んで、版に上梓せた。今日と雖も繼續して居る。最早百冊に垂なんとして居る。其れは西洋紙に印刷したものが百冊であるから、原本にしたら何千卷と云ふ事を其中に包含してあるのだ。

◎千久よりも前に、埧檢校が群書類從をつくり、近來は近藤瓶城と云ふ人が、史籍集覽を刊行した。斯の如く色々あるが、要するに古い書物の散逸を防がんが爲に是れを版にしたのである。

◎併し乍ら是等は九牛の一毛にしか過ぎない。其處で自分は古書を刊行して、實地に就て考へて見た事がある。其れは困るのは、書物の名を知る、其良い本であるると云ふ事を知つても、其れが何處にあるかゞ不明らない事た。どうせ有りふれた物でないから、數が少ない。此處に一本があるが、是れが正しくないとなると其れを校正する善本が得たくなる。處が其善本が何處に在るか不明らないのである。是れは我輩の實驗た。

◎苟くも同一の事をやつた人は、誰れも同じ不便を感ずるに違ひ無い。で彼れ是れを考へると、今日は何處に何う云ふ本があるかを調べて置く事が肝要である。

◎所で、各々が大切にして居るところの本であるから、一私人が勢手次第に漁つて歩き、『お前の所には何々があるか』と云ふ譯には行かぬ。第一又力の及ぶべき事でも無い。將た人がオイソレと應ずるものでもない。

◎之れが圖書館に在る本や、何にかで有れば容易であるけれども、一家の秘藏書物に指を染めて、之れを取り調べると云ふ事は一個人の力では困難である。之れは何うしても政府の力、公力に依つて、取調をしなければならぬものと思ふ。

◎丁度帝國大學史料編纂と云ふものが、全國の文章を取調べた。是れはなか〳〵澤山集つたものであるが、殆ど秘密にして居つたものを大抵出した譯である。這麼事は何うしても一個人の力では出來ない事である。政府の力で有ればこそ集められたのである。（在京記者）

早稲田大學圖書館

蟹泡錄

（芸）

▲隱れたる圖書の調べ（四）

市嶋　謙吉氏談

◎隱れたる大切な圖書や文章類を取調べるにも、矢張政府の力で行つたならば困難では無からうと思ふ。

◎內務省に於て、國寶の取調と云ふ事をやつて居る。國の寶とすべき程の物は、たとへば建物とか、器物とか、或は書いた書類とか云ふものであるが、是れは國寶となるには、夫れ〴〵規定が有つて、政府の帳面に、國寶又は國寶に準ずると錄されてある。書物も斯の如くに、政府の力で行らなければならぬ。

◎前に言つた事を約めて言へば、帝國大學の史料編纂は古書を集めて。內務省では記錄、文章、書物等を國寶にしたが、是れは無論圖書を保存する一手段には違ひ無い。或は其れたけの手續が有つたら其れで可いじや無いかと言ふ人が有るかも知らぬが、其れは不可ん。

◎其れは或一定の物に限られて居る。帝國大學史料編纂は、歷史の部類に屬する物たけでしか無い。內務省の國寶の取調は、之れも或る限られた範圍がある。即ち國の寶になるやうな物たけである。空海の手蹟であるとか、天子の辰翰であるとか、極めて範圍の狹いものである。之れも保存と云ふ事の一部分ではあるが、歷史の材料にもならず、國の寶程にもならぬ物で有つて、しかも大切な物は實に澤山ある。

◎是等の中には、色々學術の爲に用を爲す物が、何万何千あるか知れない。然るに是等は歷史の材料や、國寶に準ずべき物で無い爲に一向に手が觸れてない。登錄されて無い。

◎自分が今是非とも保存しなければならぬと思ふ物は、即ち此範圍に屬すべきものである。偖之れを何うして、第一取調べるかと云ふ實地の問題は、格別面倒なものでも有るまいと思ふ。丁度歷史の材料を蒐めると同じい道理で、口其衝に當るのが內務省で無く、文部省であると云ふ違ひたけでしか無い。

◎文部省は國の文教と云ふもの〻爲に、是等の文章等を埋沒に附せしめずして、成る可く是れが活用に勉めないければならない。故に是れは確に文部省の役目、しかも大切なる勤で有らうと考へる、其れで省內に或一局を設けて、數名の係官を定めて、各方面の圖書に通ずる學者を委員に擧げ、そして全國に派遣せしめて、取調べさせるのである。

◎先第一に多あるのは寺や宮である。寺とか宮とか云ふ物は、多く火災に罹らない。又成立が古いから、存在して居る書類等は、時代の上からして貴重のものた。其れから華族、公卿其次には一個人一私人と、斯う歩を進めて行くのである。（在早記者）

早稲田大學圖書館

蟹泡錄 (十七)

▲隱れたる圖書の調べ (五)

市嶋 吉 謙 氏談

◎前にも言つた如く、文部省内に或一局を設け、數名の係官を定めて、各方面の圖書に通ずる學者を委員に擧げ、其委員をして全國に派遣せしめて、調査させるのであるが、第一は寺と宮とである。

◎第二には華族、公卿の範圍に及ぼすのである。華族などは昔大祿を食んで居たから、多くの書を蒐め得る力が有つた。又一家の記錄と云ふものがある。公卿も亦然りで、朝廷の儀式典例を司つて居たから、其れに屬する所の記錄と云ふやうなものが存在して居る。故に大名華族や公卿華族などの所藏には、珍重のものが有るに違ひ無いと思ふ。

◎其次には一個人、一私人の所藏を取調べる。云ふ迄も無く帝室には最も貴重すべきものが有るたらう。斯う云ふ順序で斯う云ふ方面を取調べたならば、隨分多く貴重なものを得られる。

◎無論其書物、文章も取捨選擇が肝要である。凡そ豫め標準を立てゝ、取捨せねばならぬ。即ち學術の助になるものだけを取調べさせるのである。斯う云ふと、なか〳〵容易なことでは無いやうに見ゆるけれども、實地に於ては左迄に六かしい事では無い。

◎大体何處に何う云ふ書物があるか位は書物學者には、見當が着いて居る。加賀には斯う云ふ物が有るとか、是れ〳〵の書物が水戸には在ると云ふことが、分明つて居る。是等の物は世の中に出て居ないから、普通の人には明瞭つて居る事た。局も、其道の人には分明るまいけれども、面倒のものでは無い。

◎書物が何万冊あつても、其中の大多數は、大概圖書館に在るやうなものた。那麼ものには用が無いので、只取り上げるものは、其少數の部類に屬するものであるから、思つた程に面倒では無い。

◎斯の如き方法を以て、全國の所藏書物を取調べたとして。其結果は何うするかと云ふに、つまり部類を分つて、書籍目錄を作り、其れに註を入れ、年代や、人や、又其所有者の名などをも記入し、是れを集めて大成する。此大成した帳簿を臺帳と名づける。

◎此臺帳なるものを、若し出來得るならば、之れを印刷して、諸方の學校や圖書館や、又は特別の研究をなす學者に供給するが一番宜い。

◎併し是れが入費が要つて出來ないと云ふならば其れはせずとも宜い。臺張たけでも作つて、文部省に備へ付けて置ていつ其れでも足る。(在京記者)

誰にでも見せると云ふやうにして置けば

早稲田大學圖書館

蟹泡錄 (十八)

▲隱れたる圖書の調べ (六)

市嶋 謙吉 氏談

◎其處で、斯う云ふやうに取調をするに就ても、今日では餘程便宜の事がある。もとはなか〳〵記錄と云ふやうな物は、容易に見せなかつたものである。帝室の力を以てしても、見る事が出來なかつたのである。政府の力でも駄目であつた。

◎其れは諸々の理由が有つたので、一家の秘密を知られる事に因つて、災厄を買ふやうな事が有る。又何事も世襲の盛んな德川時代には、其秘密も一家の秘傳として世襲したものである。即ち其家の株である。其家の重きをなす所以、其家の光る所以であるから、其れを人に知られる事は非常に忌んたものた。たから秘して出さないものが多かつた。

◎今日ではモー事態が變つて終つた。其れに史料編纂の爲たとか、國寶の調査たとか云つて、取調べた慣例があるから、見せたところで害をなさぬと云ふ事を知つた。のみならず、世間に知られるのは自分の持物の値打を發揮するのであると知つたから、餘程固陋の者で非ざる限りは、其れを秘する事は先づ大体に於て無い。況んや取調べるたけで、其物を借り出したり、寫したりするのでは無い。其れが何んであるか、登錄するたけの事でしか無いのである。殊に文部省の登錄濟と言へば貴重の物であると云ふ估券が付く譯である。故に今は最も良い時期である。

◎但し茲に研究を要するは、登錄した物は容易に賣買を許さぬやうにするか否やである。國寶なんかになると、自ら賣買は出來ない、内務省の許可を得ないければならぬ。斯の如く重くするか否やが問題である。自分の考へでは、那麼に干渉することはあるまいと思ふ。たゞ登錄してある物は賣買の届出をさせる。是れは何んでも無い手續であるけれども、多少人が厭に感ずるのは其點であらう。併しまさか其事を紙に病む爲に物を秘して、文部省の取調に應じないと云ふ事はあるまい。兎に角大切の物を滅多に賣買するものでは無いから……。一方には却つて他へやらずに、保存すると云ふ奬勵にもなるたらうと思ふ。

◎其處で、台帳を文部省に備付けて置くと、何れだけの利益があるかと云ふに、學者が研究の材料に苦しむ場合に、文部省へ行けば材料の所在だけは知れると云ふ譯だ。後は唯其人々が其所持者の家へ行つて借るなり、寫すなり、讀んで來るなりすれば宜い。所在が分明ると云ふ事が肝甚なのである。

◎其他圖書出版經營をなす者、或は校正用として善本を欲する者、公に刊行する材料に供し度いと欲する者等には非常な便利である。今迄出た杜撰の物を改訂する事も出來る。

◎是れが世の文敎の爲に、少なからぬ助けとなる。我々は此旨意を以て文部省に建議した。當局者も賛成したが、今は國費多端の場合であるから、直に實行は出

早稲田大學圖書館

来ぬが、其爲に躊躇はしない、其事の良い事には賛成すると云つて居るから、其内に實際に行はるゝ場合を見ることがあるだらう。（完、在京記者）

都市番地改良論（上）

市嶋　謙吉氏談

◎電車などゝ云ふものが設備され、交通が便利になつて來たので、從來抱俥を置いた人にも殆ど廢するやうになつた。市街のあちこちに散在して居た俥夫も減じて來た、地位ある者も電車に乘るのを便とするやうな傾向を示し、交通上大に賀すべきことである。

◎併し乍ら斯の如く交通が開けて來たにも拘らず、茲に除き得られぬ不便の事が一つある。其れは居所が容易に知れない事である。何某と云はれる大邸宅は直き知れるが、稍々隱れたる人の所在となると容易に知れない、折角電車で三時間位要する所を半時間位で達する事が出來たにしても、偖其附近に到つて、其家を見出す爲に非常の時間を要する。三里位の間を突嗟の間に來て居ながら、眼前に在る五六町の所を、事によると小一時間もかゝる。わざ〳〵俥に乘る爲に電車賃の五倍位も出して、僅に尋ね當る有樣だ、

◎位置ある人が位置ある家を訪ねるのは左程困難では無いが。あらゆる階級の人を訪問するやうな人には、甚だ不便である。是れは即ち番地搜索の面倒な結果である。交通の便宜が開けても、這麼ところに不便がある爲に、是れに費す時間を一年に通算したならば、驚くべき數で有らうと思ふ。此不便を除かねば、折角開けて來た交通の便利を大に削がれる。

◎此不便は結局番地の搜索が困難で番地の搜索の困難のゝは、番地が混雜して居るからである。例令ば第十番地のさきには第十一番地があるべきもの、第十一番地のさきには第十二番地があるべきものたのに、實際は左樣なつて居らぬ。十番地から直ぐ何十番地と飛んで居る。是れは大都會に棲んで居る者は誰も知つて居る事である。

◎其れから大きな邸宅地を小分した所などは。一の番地の中に又小區劃がしてあつて、何號、何號と分けてある。例令ば本郷の西片町の十番地とか、牛込の矢來四番地であるとかは、甲の何號、乙の何號、或はいの何號、ろの何號、はの何號と、澤山小分してある。たから西片町の十番地迄は容易に行けるが、其中の何某を訪ねるのが骨が折れる。

◎故に是れを改良せねば、充分の便宜を得られぬ、茲に於てか番地改良論が起る譯である。併し是れは容易に行はれない問題だ。東京の如きは市區改正が年を追ふて實行されて居るが、此市區改正と共に番地も改良さるべきものである。

◎併し實際は容易に行はれない。是れは偶然では無い。一体都會の番地と云ふものは輕々に改むべきものに非ず、又改めて得らるべきもので無い。其れには色々の理由も有るが、要するに土地所有權に關係を持つて居るからである。一つの邸宅の地券の臺帳から割出されて居る地區である。其れを動かすと、其所有權に響く從つて幾ら大きな邸宅の如き、何町歩あらうとも、其れが一つの番地となつて、地券臺帳に記錄されてある。其れを改むるには先づ臺帳から變更せねばならぬ。是れは大事業である。關係が非常に廣くなる。（在京記者）

都市番地改良論（下）

市嶋　謙吉氏談

◎前述の如き理由の爲に、番地變更と云ふ事は實行が困難である。故に市區改正は出來るが、番地には今迄手を着け兼ねて居る理である。

◎では今日の狀態に安んじて居るかと云ふに、世の繁劇になると共に、時勢の趨向は何うして現狀を許さない。茲に於て何等かの方法を以て、番地の錯雜した狀態を改良せんければならぬ。何うすれば宜いか研究の價値ある問題である。

◎此問手嶋精一君と逢つて、談此事に亘つた時に一案を得た。夫れは極めた簡易な方法である。一口に言へば舊來の番號に頗着無く、別に新番號を付ける。今迄の番地は土地所有權に附帶したものとして其儘にして置き、更に人の訪問に便せん爲に、新番號を附することである。

◎即ち一つの市街を町内から割出して、上の方から一丁目、二丁目、三丁目と呼ぶ。從來は二丁目の次に四丁目が有つたりしたが、新規に一丁目、二丁目、三丁目と順番に定める。一丁目は或方角から數へて、上に在る所を第一番地と定める。夫れは現在其處が何百番地、何千番地で有らうが那麼ことは構はぬ。家並に一番地、二番地、三番地と順番に打て來る。裏の方も順番に打つ。外國にある例の如く、右と左とに同じ丁目が分れて居る場合には、右は偶數の番號、左は奇數の番號を打つと云ふのも、一つの方便である。兎に角此側は一番から何番に到ると、號數を尋ねれば順番に行けると云ふやうにするのである。

◎今の番地とても、初めは整然として居たのだらうけれども、追々家が增して來て、後ればせに割込んで造つたので、其結果一番地の隣に五百番地が出來たと云ふやうな次第であるのだから、新番號を附するにしても、將來戸數が增して來ることを豫想して、豫め餘地を作り、番地に間隙を付けて置く。左樣すれば將來戸數が增して行つても、段々と附けて行けばよい。斯の如くに新番號を公の力で定める。丁度電話の番號を附ける如くにする。斯うすれば人を訪問する時は新番號を以て尋ねるから、少し慣れゝば容易に知れるやうになる。

◎無論斯樣な方法を取るの易い事だ。土地を見るので無く、家を見るのであるから、從來の番地を變更する必要が無い。根本的に地券臺帳を改めやうとしては、百年河清を待つ如きものである。

◎此番地の錯雜は關西、大阪、京都などは餘り無い。京都は碁盤割になつて居るし、大阪も京都に次いで比較的正しい。名古屋とか新潟とかは市が小さいから、

早稲田大學圖書館

早稲田大學圖書館
早稲田大學圖書館

以下全て

白紙

早稲田大學圖書館